

草の根の 架け橋

農村リーダーにおける
アジア学院の研修効果に関する調査



助成：フェッツァー研究所

ご挨拶



李晓安 (リ・シャオアン) 博士
フェッツァー研究所 プログラム・オフィサー



大津 健一
アジア学院 アジア農村指導者
養成専門学校校長



荒川 朋子
副校長・事務局長

米国ミシガン州カラマズー市の私立財団であるフェッツァー研究所では、愛と赦しの力について世界中の人々が意識するようになることを目標に活動しています。愛と赦しは、世界中の様々な文化や伝統を背景に持つ人々によって日常的に実践されていて、どちらも人間社会の構造において中心的な価値観であるとみなされています。こうした中で、フェッツァー研究所では、愛と赦しの力が今日の世界を良くするために実用的であることを調査し、愛と赦しの力を活性化し称えることで、独自の役割を果たそうとしています。人々がいかに多様な観点から愛と赦しを真に経験するのかを知りたいと思っています。

この使命を達成するために、2010年から2013年において、世界中の様々な分野の数百名のアドバイザーと共に、愛と赦しを実行した模範となる存在を特定し、成功例を考察し、そこから学び、個人やコミュニティや組織のためになるように、知恵と最も良い事例を共有してきました。

アジア学院をそのような模範例として特定してくださったアドバイザーのリチャード・ガードナー教授に感謝いたします。アジア学院は、神の愛を「多人種、多文化、多言語、異宗教間のコミュニティ」という形で表しており、草の根の農村指導者が貧しく虐げられた人々と共に働く際に「人に仕える指導者」の意識をより強く持てるようになることを目的としています。過去40年においてアジア各国やその他の地域出身の千数百人もがアジア学院に携わり恩恵を受けてきました。フェッツァー研究所は、アジア学院と協働する中で、影響度調査を行うことに価値があると認識しました。これは、アジア学院の教育的実践と、帰国後の地域コミュニティへの奉仕や貢献を含めた学生の学びの体験とその効果について、より完全に分析評価するためです。本評価がアジア学院の今後に役立つだけでなく、人に仕える指導者の理念に満ちた指導者を育成することを主な目標とし、愛・赦し・共感・思いやりを深く表現したこのような成功例があることが広く知れ渡ることを願っています。

この調査責任者であるセラジーン・ロシート氏と調査団のメンバーの皆様にも多大なる感謝を表します。本冊子に記されている本評価で得られた学びは称賛に値するものです。最後に、ご協力くださったアジア学院の関係者の皆様、調査に参加してくださった全てのアジア学院学生及び卒業生の皆様、見えない所で貢献し本評価の成功を可能としてくださった多くの方々に深く感謝いたします。

40年のアジア学院の研修事業の歴史において、このような形で外部の方による客観的な研修評価が行われたのは初めてのことです。その要望は長い間ありましたが、なかなか機会に恵まれませんでした。今回上智大学のリチャード・ガードナー教授のご推薦により、アメリカのフェッツァー研究所の事業としてアジア学院の評価事業が採択され、在日のNPO/NGOコンサルタントとして経験豊かなセラジーン・ロシート氏によって実施されたことは幸運なことであり、また大きな喜びです。

アジア学院は「共に生きるために」というモットーを掲げ、不可能とも思える多文化共生、異文化理解、すべて生きとし生けるものを愛することで地域社会の平和を作り出すことのできる人間、草の根のリーダーの育成を試みてきました。そのために神の与えた創造物、その中でも人間をはじめとする生物の生命を支える自然を尊び、仲間と共に協力して環境とコミュニティを正しく維持管理する技術と能力を高めることは大変重要なことと考えてきました。そこから農的なコミュニティを基盤にしたユニークな研修スタイルが生まれて来たわけですが、これまで様々な試みがされてきたといえ、世界中の農村あるいは僻地に散っている卒業生の活動からその研修成果を測ることは大変難しいというのが現実でありました。

しかし今回セラジーン・ロシートによって実施された評価事業で、私たちの研修が決して独りよがりなものでなく、私たちの理想とするものに限りなく近い成果を生んでいることが実証されました。そこにはフェッツァー研究所の掲げる「愛と赦しの実践」という評価指標が大変有効に働いていたことを申しあげておかねばなりません。私たちはこれまで「愛と赦し」という切り口でアジア学院の研修を評価してきたことはありませんでしたが、この切り口をもつことにより「愛と赦し」という現代において変重要な人間の資質、人間社会の諸問題を解く鍵が私たちの研修によって、どれほどの人に、どう習得され、どう活用されてきたかということが測られることになりました。その分析は私たちの想像をはるかに超えるものでした。

2年という時間と膨大な労力を通じて得られた調査結果は大変重要かつ貴重なもので、それをこれからの方針策定に大きく役立てて行くことが私たちの義務だと考えております。

草の根の 架け橋

目次

- 2 この調査について
- 4 農村指導者研修プログラムについて
- 7 参加動機：アジア学院を選んだ理由
- 8 アジア学院の研修プログラムの影響
- 9 学生への影響
- 11 卒業生への影響
- 21 帰国後に卒業生が直面する課題
- 22 卒業生たちの事例ストーリー
- 22 スリランカの事例
- 24 フィリピンの事例
- 26 募集および選考方法
- 28 筆者あとがき



2013年度の学生



この調査 について

本評価事業は具体的な数字についてできる限り言及したが、統計的情報は限られており、質的データに基づいている。以下の報告は、膨大なデータを分析した結果の概要をまとめたものである。

評価目的～なぜこの評価が行われることになったのか～

アジア学院の40周年を目前にして、アジア学院理事会・評議員会は、アジア学院が創設から一度も組織的な評価の過程を経ておらず、40年の歴史から大いに学ぶべき点があるということを確認するに至った。それを受けて、この評価の目的を以下のように定めた。

- 1) さまざまな情報源(職員、卒業生、2013年度学生)から、特に、アジア学院のカリキュラム構成要素のうち学生にとって最も意義深いと考えられる点と、卒業生が帰国後にそれぞれの出身コミュニティでアジア学院での学びを実行に移せたかどうかという点を中心に意見を聞くこと。
- 2) これらの意見を活かしてアジア学院のプログラムが個人、組織、コミュニティの変容にどのように貢献したかを査定すること。
- 3) 今後のプログラム開発に向けた提言をアジア学院に提供すること。

評価対象者～評価に反映された人々の声～

2013年4月から2014年4月にかけて、36か国出身の300名弱の人々(卒業生、学生、現職員、元職員)からデータ収集を行った。データ収集方法としては、個別聞き取り、グループ聞き取り、アンケート調査、訪問調査、文献調査等の手法がとられた。

2013年度のアジア学院学生の全員から聞き取りが行われ、全卒業生の12%に対しては直接的に個別あるいはグループでの聞き取りが行われた。この評価調査の終盤において、スリランカ(2014年1月訪問)とフィリピン(2014年4月訪問)での現地訪問調査の方法で、さらに46名からの聞き取りが行われた。

本評価事業全体としては、アジア学院の40年の歴史を通じた複雑な事柄や人間関係等の理解を深めるために2年間の期間を費した。(2013～2015年)。

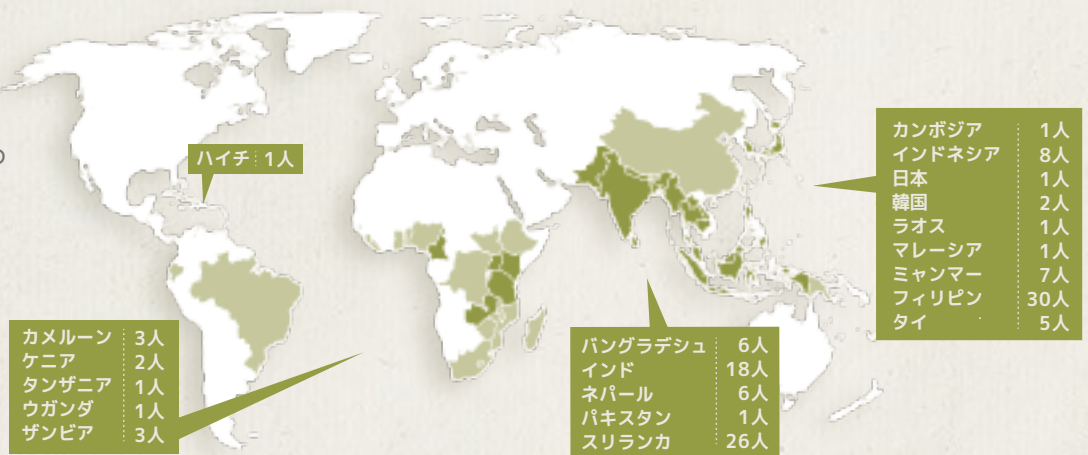
124人の卒業生



注：調査に参加した男性の割合は、ARIの卒業生の実際の男女比率である女性37%男性63%よりもわずかながら上回っていた。

聞き取り調査に参加した卒業生たちの出身国

アジア学院の卒業生たちの出身国56か国のうち、20か国の人々がこの研究のための聞き取り調査に参加した。



卒業年度	～1979年	1980年 - 1989年	1990年 - 1999年	2000年 - 2009年	2010年～
調査に参加した卒業生の数	17人	21人	23人	48人	15人

調査対象テーマ～聞き取りで取り上げられたテーマ～

調査チームは、研修資料やアジア学院職員との話し合いを通じて、テーマの一覧を作成した。話された内容のうち中心的なテーマのものを「研修プログラム開発」、「プログラムの影響と効果」の2つのカテゴリーに分けた。

【研修プログラム開発に関するテーマ】

- ・学生募集と選考方法について：研修に適しているのはどのような人か、最適な学生の探し方、アジア学院のネットワークへの新しい組織の取り込み方
- ・アジア学院のカリキュラムについて：何が役立ったか、学生にとってさらに意義深いものにするにはどうしたら良いか
- ・課題について：研修期間中および帰国後に直面した課題
- ・アジア学院のアウトリーチとネットワーク形成について：研修修了後の卒業生とアジア学院との連絡、コンタクト、関わり合い

【プログラムの影響と効果に関するテーマ】

- ・動機：研修参加の個人的理由、学生を送り出した組織の側の理由
- ・学び：学生・卒業生が何を学んだか、組織・コミュニティにとって最も意義深い学びは何か
- ・個人的変容：研修が学生・卒業生の考え方や行動にどのような影響を及ぼしたか
- ・組織・コミュニティの変容：卒業生が帰国後に何を実行に移したか、技術・知識・価値をどのように共有したか

調査の課題

どのプログラム評価事業にも言えることだが、質の高いデータを収集するには課題もある。当アジア学院評価事業が直面した課題は以下の通りである。

40年という時間の経過

過去40年間の卒業生から聞き取りを行うにあたって、卒業生の転居等により連絡先が不正確になっていたり、卒業生の特定の情報に関する記憶が薄れてきていたり、時と共に物事の見方が変わっていたり、場合によっては卒業生が亡くなっていたり等、さまざまな課題があった。

最新の連絡先の欠如

まずは全卒業生の半数に対しEメールにて連絡をしたが、残りの半数の経験や回答がこれらの卒業生と大きく異なっているかどうかは不明である。

聞き取り対象へのアクセス

アジア学院コミュニティの多様性に伴い、聞き取り調査で得られたデータには偏りがある可能性がある。回答された意見の質や量に影響を及ぼす要因としては、英語の能力、個人の性格や社会的特徴、ジェンダーによる行動規範の違い等があげられる。また、純粋に物理的な問題から、電気が通っていてインターネットにアクセスできる卒業生に偏ったデータとなった可能性が高いと言える。例えば10名

のミャンマーの卒業生から電話やスカイプを通じて聞き取りを行う予定であったが、電話およびインターネット回線の都合で2名のみに対してしか調査を行うことができなかった。

自己選別による意見の偏り

卒業生や学生から寄せられた意見の中には、建設的な批判もあり有益であったが、全ヒアリング調査の対象者の中で、否定的な意見だけを述べた人は一人もいなかった。これは、自己選別の結果である可能性がある。つまり、ヒアリングに臨むにあたって自己検閲が起こり素直に全ての意見を述べていなかったか、そもそもアジア学院に対して不満点のみがある人は卒業生等のネットワークから外れていてヒアリング調査の対象とならなかった可能性が考えられる。

回答の重複

全回答者のうち約50名は、グループ聞き取り、個別聞き取り、訪問調査、アンケート調査等の複数の方法で情報を提供している。そのため、この50名の見解が評価結果により大きく反映されていることになる。統計的には信頼性が損なわれるとも言えるが、この50名の卒業生からは非常に詳細な情報が提供されている。

ここに記されている評価結果によってアジア学院での経験を垣間見ることができ、また限度はあったが、さまざまな背景を持つ多数の卒業生から幅広いテーマについての意見を聞くことができた。こうして集められた広範な意見と、それに基づく分析が、アジア学院を強化していくための礎となる。

アウトプット・成果

このブックレット以外にも、本評価に基づいて以下のようなレポート、論文、発表等のさまざまな媒体で成果が生み出されている。いずれの場合も、アジア学院におけるプログラム開発と、アジア学院のアウトリーチ活動の拡大を目的としている。

- 1)プログラム開発と組織開発を目的とした、アジア学院の職員対象の内部発表および会合。
- 2)管理職員対象の参考資料および組織基盤の強化を目的とした詳細な調査結果を含んだ資料の作成。これら資料には、組織と研修プログラム開発の両方に対する提案と参考資料が含まれている。
- 3)アジア学院の影響に関する研究を深め、本評価で用いた手法や取り組みに関する認知度を高めることを目的とした論文やそれらの学会での発表。



農村指導者研修プログラム について



アジア学院は認定教育機関として技術研修を行う機関であるが、研修の手法はこれまでのような学校、職業訓練校、大学等で行なわれているものとは大きく異なる。地域共同体の開発、農業技術、リーダーシップに焦点を合わせた研修にもさまざまなものがあるが、アジア学院をアジア学院たらしめているのは、異なる研修のそれぞれの焦点を融合させている点である。また、一人一人が最大限に能力を発揮でき、環境に優しく、公平で、平和な世界を創っていくという使命に徹するため、アジア学院では、農業投与、高額な農機、単一作物の大規模栽培などのいわゆる「現代的な」農業技術は奨励されず、持続的で自給自足を可能とする地域資源を利用した農法が用いられている。

アジア学院のモットーである「共に生きるために」は研修プログラムの全ての面に見られる。毎年25～35名の学生が、アジア、太平洋の島々、サハラ以南のアフリカ、ラテンアメリカの15～30のコミュニティから集まり、アジア学院で9か月間集中的に行われる農村指導者研修プログラムに参加している。学生自身が人種、民族、宗教的に虐げられた立場の人間であることも多く、それぞれが所属するコミュニティ組織から、個人の能力と組織基盤強化のために派遣される。虐げられたコミュニティから来ているため、旅行や国際的な場での経験があまりない人が多い。

アジア学院で指導的立場にある人々は、学生やボランティアと共に農作業や研修、日常の雑務に携わりながら働いている。そこでは、宗教、民族・言語による集団、学歴、カースト、性別、役職、コミュニティにおける立場などによる相違や上下関係を平等な序列構造に置き換えたコミュニティを作り上げるべく、360度全方位の体験ができるようになっている。また、このような環境では、平等だけでなく個人的な成長や変容も促進される。

農村指導者研修プログラムの中心的価値観

農村指導者研修プログラムは以下の3つの柱となる概念に基づいている。



人に仕えるリーダーシップ

仕えるリーダーシップとは、人々に仕えることによって指導するという考え方であるが、これはアジア学院創設当時からの中心的価値観であった。学生は、アジア学院職員やアジア学院のコミュニティを成す他の人々の行動や、教室での学び、交流行事、共に農作業をする中での他の人々との関わりを通じてリーダーシップについて学ぶ。教室では、マーティン・ルーサー・キング牧師やマハトマ・ガンジー等のさまざまなリーダーシップの形や、組織経営の技術、より有能なリーダーとなる助けになるような最近の課題などについて学ぶ。学生には、農作業のチームを率いたり、学校行事を開催したりすることで、リーダーシップの技術を実践に移したり磨いたりする機会がある。職員と共に、またチーム単位で作業をすることによって、学生は仕える立場と従う立場の両方から学ぶことができる。



フードライフ

「フードライフ」とは、食(フード)と生命(ライフ)とが互いに依存した切り離すことができない存在であるということを表すためにアジア学院で作られた独自の用語である。アジア学院では、土には価値があり、土に触れながら働く人々もまた価値があると考えられている。ゆえに、自らの手で食物を作ることの尊厳と充足感にもまた価値があると考えられている。農業従事者や農村が見下される地域が多いが、アジア学院では逆に生命を供給する尊敬すべき対象であるとされている。加えて、アジア学院の活動には、土作り、種まき、収穫、食事の準備、食後の皿洗い、食べ残しの再利用、堆肥作り、さらには所得創出のための農産物の販売や加工を含めた食物サイクルの全過程に対する深い尊敬の念が具体的に表されている。究極的には、フードライフのサイクルの全段階が、持続可能性の促進を目的とした地域資源を最も有効に活用することにつながっている。



地域社会づくり

学術的な意味で地域開発と言われる概念とは異なり、地域社会づくりにおいて強調されるのは、コミュニケーションを絶えずと続ける、お互いを気遣う等といった、地域社会を構成する多様な人々との分かち合いや積極的な関わりを通じた学びである。学生は、学び、労働、食事、居住空間、日常の雑務等を共有することで、お互いの経験、知識、考え方、ノウハウ等を学ぶ。アジア学院では、共同生活の全ての局面で各自が重要な役割を果たすので、日常的に言語、社会、文化、民族、宗教の壁を越える経験をする事となり、全ての学生が個人としてまた共同体として成長し、多様性の強さに気づくこととなる。そして、そこに至るまでに直面する課題や経験する喜びこそが、学びと変容の過程であると言える。



研修の基礎にある社会正義の考え方

研修で得られた技術や知識には、研修修了直後から利用できるものが多いが、農村指導者研修プログラムには、社会正義を推進するという大きな使命もある。多様な人々のいる環境で農業技術開発やリーダーシップの技術を実行に移すことの究極的な目的は、理解理解、寛容、尊重、平和等を草の根レベルで推し進めることだ。個人の変容と価値観に基づいた変容を徹底的に目指すことで、アジア学院の卒業生がそれぞれのコミュニティで幅広い変化をもたらす力をつける可能性が生まれている。

カリキュラム概要

カリキュラムを構成する柱は以下のような学びである。

- ・ 体験的な学び：畑、台所、寮などで、日常の作業や活動を実際に行うことを通じた学び
- ・ 教室での学び：さまざまな問題を扱う授業や技術の紹介（プロジェクト計画書の書き方、地球温暖化、非暴力的コミュニケーション方法、など）
- ・ 信仰・慣習に関する考え方の分かち合い、いろいろな宗教行事への参加
- ・ コミュニティ行事：企画力や時間管理能力をつける
- ・ 日常の雑務の処理
- ・ 個人およびグループとして影響を受けたことや感想を聞く
- ・ ボランティア、講師、支援者等の定期的訪問による学院外の人々との交流
- ・ コミュニティ組織や有機農場の見学



カリキュラム評価

参加者と卒業生に尋ねたカリキュラムに関する質問は2～3問で、以下のような内容だった。

- 1) 研修のテーマ、研修で扱われる技術、その他減らすべきもの、削除すべきもの
- 2) 研修のテーマ、研修で扱われる技術、その他追加すべきもの、拡充すべきもの
- 3) スケジュール、内容のバランスが良いかどうか、研修材料、研修方法等の全般的な研修の流れについて

ほぼ全ての卒業生と2013年度の学生が、研修内容全般に関して、特に知識、実践技術、リーダーシップ研修の面において、満足であるとしている。ただ、1990年代の指導陣の移行があった時期の卒業生からは、批判的な意見が聞かれた。

2013年度の学生からの聞き取りや、2008～2012年度の学生に関する文献調査から分かったことは、研修プログラムがどのように運営され、各自が何を学んだかについての答えが多かったことである。2008～2013年度の学生を全体として見るのは、その期間にカリキュラムの内容や手法がほぼ変わらなかったからである。

聞き取りを行った卒業生は、学んだことや学びたかったが学べなかったことを中心に語った。アジア学院が21世紀の社会のニーズに適応していくことを望むと語る人もいた。



研修プログラムとカリキュラムに関する意見

全般的に技術、知識の開発に関するテーマでは、追加や修正に関する案が多くあげられたが、削除に関する意見はあまりあげられなかった。

以下は、カリキュラム向上案としてあげられたものの一部である。

- 学生のニーズと期待に沿った講師や講演内容にする
- カリキュラムを半期ごとに分け、それぞれに到達基準的を絞った学びの課題を設定する
- 見学や訪問の際の目的や期待すべき点を明確にする

また、ワークショップや実践的学びに付け加えるべきトピックとして、多くの学生や卒業生から以下のような提案があった。

- 時事問題： 持続可能な開発、権利、エコロジーと環境、気候変動と災害、ジェンダー等
- 組織管理能力： 戦略的計画、プロジェクト管理、計画書作成、モニタリングおよび評価等
- コミュニケーション： 英語力および日本語力の向上、異文化コミュニケーション能力等
- リーダーシップ： 多様な効果的指導者像や効果的指導者となるための方法
- 農業関係の技術： さまざまな環境に適した技術、食品加工等の所得創出につながる取り組み等
- 活動家としての技術： アドボカシー(権利擁護活動)やコミュニティの組織化(住民組織化による住民運動)等
- さらに、学生や卒業生の一部からは、学生が既に持っている知識や技術をアジア学院側が積極的に汲み取ってカリキュラムに加えてはどうかという提案があった



男女の役割についての劇を演じる
2013年の学生たち

最近の学生からは、プログラム開発に関しての以下の点を含めた意見が多く聞かれた。

- 異文化理解にもっと焦点を当ててほしい
- 授業を行う人の言語運用能力および通訳者の技術を向上してほしい
- 学生間に言語や知識の差があることにもっと考慮してほしい
- ロールプレイ(テーマを劇にすること)やシミュレーション活動等の参加型の手法を取り入れ、テーマに深く関わることのできる体験型の学びにしてほしい
- 学びを実践に移す準備のために、一年を通じて学んだ内容を熟考し消化する時間がほしい
- 卒業生の中からは、短期の復習研修コースを設け、学生が最新の知識や技術を学び、経験を共有できる場があれば良いという声も聞かれた

カリキュラム開発

2014年春に行われた本評価チームとの最初の協議からまもなく、職員たちの手によって2014年と2015年のカリキュラムの変更が始められた。



アジア学院の職員(2013年現在)

変更例としては、見学に行く前に見学地の情報を記した書類を作成し、学生に見学の目的と意味を話し合う機会を増やしたことがあげられる。また、職員による学生に対する聞き取りの回数も、それまでの研修開始時と修了時の2回から、研修中の1回を増やして計3回とし、学生のニーズ、学び、課題、関心等をより把握できるようにした。

これは、学生と、学生のメンター(指導助言者)でありアドバイザーであるコンサルタントとの定期的なミーティングとは別に行っている。

参加動機

アジア学院を選んだ理由

学生はなぜアジア学院の研修に参加するのか？
卒業生と学生に対して、アジア学院の農村指導者研修プログラムに参加した本来の理由や動機について尋ねた。調査時にプログラムに在籍中であった学生達は、学びの最中であっての回答を、卒業生は記憶をたどりながら参加を決意した理由を答えた。その中には、はっきりと特別な理由をあげた人もいれば、一般的なコメントのみの人もいた。

1) 農業技術やリーダーシップ力を伸ばすため

アンケート調査や聞き取りを行った全学生・卒業生の約70%が、農業技術やリーダーシップ力を改善したかったと答えている。この2つに関連付けた意見も多く、アジア学院での研修によってリーダーシップのテクニックを学ぶ機会が得られ、そのおかげで、自分が得たかった農業技術をいざ実践する際には、出身コミュニティの人々によりよい援助ができるようになるだろうという声も聞かれた。

聞き取りを行った2013年度の学生31名の多くは、研修開始時から、出身コミュニティに変化をもたらすためにこの研修をどのように使うかを考えていた。12名は農業技術を習得したいと語り、特に有機農業に興味があると述べている。例えば学生14番はこのように説明している。

「私は僻地の農村地域から来ました。私達には、リーダーシップや農業や開発に関するさまざまな技術が必要です。コミュニティのために学びたいと思っています。アジア学院は、農業指導力をつけるのに良い研修機関だと思います。私自身にとって良いことは、私のコミュニティにとっても良いことなのです。」

卒業生も同じようなコメントを多く寄せている。インターネットを通じたアンケート調査の結果を見ると、様々な参加理由があげられていた。

- 30% リーダーシップ・人に仕えるリーダーシップ
- 25% 農業技術全般
- 25% 有機農業
- 15% 持続可能な農業

アジア学院での研修が始まる前は、この研修は主に技術を学ぶものであり、出身コミュニティの人々に新しい技術を持ち帰ることで収穫高が上がるようになるものだと思っていたと卒業生の多くが語っている。インターネットを通じて聞き取りを行った35名の卒業生の85%が有機農業が重要であり、自分が学ぶ上で中心となっているのは地域の農家の人々に何をもち帰るかということだと語っている。卒業生11番は自らの地域の人々に関して「農業自体のテクニックを知らない」農民だと説明している。訪問調査やグループでの聞き取り調査を行った人々のうち過半数が、リーダーシップと農業技術について語っている。

2) 組織やコミュニティの基盤を強化するため

上記の技術の他に、自分の地域コミュニティや組織の基盤を強化し、それらのニーズにより良く応えられるように技術や知識を得ることが目的であったと答える卒業生や学生が多かった。アジア学院に参加した目的がこの点のみだと言う卒業生や学生はほとんどなく、他の理由と共に語られることが多かった。たとえば、2013年度の学生の20%が、組織やコミュニティが自分をアジア学院へ行かせてくれたのだから、コミュニティのために学び、帰国後に学びを共有することも参加動機のひとつだったと答えている。

少数の例外はあるものの、大半の卒業生は、コミュニティ特有のニーズがあり、そのために参加する意欲がわいたと言っている。そのニーズは個

人や社会や国ごとに多岐に渡っており、アジア学院の研修を活かせる状況も実に多様であることを浮き彫りにしている。

卒業生アンケートにあげられた他の参加動機は重複が多く、技術に関するものとして分類するのが難しい。厳密な分類ではないが、関連したテーマや回答を以下のように分けた。

約30～40% 農村生活や農村コミュニティ関連

約30～35% 地域共同体の開発関連

約30～35% 新しい環境での学び、
他国出身者との学び、日本からの学び

平和、ジェンダー、虐げられた人々に関する諸問題などの時事問題をあげたのは10%以下であった。

卒業生117番は研修プログラムを初めて知った時を思い出してこう語っている。「私は開発担当者なので、研修の詳細を読んでいるとき、他の学生や草の根活動などの話が出てきて興奮しました。開発担当者はいわば最前線で働いていますから、畑に向いてクライアントの世話をします。私の場合は農民、小規模事業者、小規模漁業者などがクライアントです。ですから、アジア学院についての紹介文を読むにつれて、自分とのつながりを感じました。私達もまた草の根活動をしている人々のために働いています。そこで、アジア学院と連絡を取り合うようになりました。」

その他の参加動機

卒業生の参加動機としてあげられた他の項目として、他の学生からの学び、新しい考え方と触れること、自分自身の精神面や宗教観の成長、開発の及ぼす影響によりよく対処する技術や知識を得ること等がある。卒業生86番は、アジア学院の使命である「共に生きるために」に特に魅力を感じたと語っている。スリランカとフィリピンへの現地訪問と聞き取り調査では、社会正義や自己成長といったテーマの話がよく聞かれた。卒業生37番は「自分自身を変える」ために参加したと言い、卒業生33番は農民と共に働くことと共に「常に平和と正義のために働く」ことも大切であり、この点でアジア学院に魅力を感じたと言っている。

全般的な意見

有機農業は、アジア学院での研修の最も主要な目的ではないが、入学応募者がそう誤解することがあるので、もっと明確な説明が必要だと強調する卒業生が数名いた。しかしながら、学生や卒業生が多様な背景を持ち幅広いニーズがあることを考えれば、技術研修だけを目的として参加する人がいても驚きではない。食料確保と飢えが日常的な問題である地域から来ている学生は、農業技術を学ぶことについての言及が多くなることもあり、それはそのような学びがコミュニティにおける栄養、健康、安定、発展に多大な影響を与え得るからだと言える。

技術の向上、地域共同体の開発そして社会正義とは、根本的なところで相互に絡み合っており、多くの回答にはアジア学院の価値観に近い参加動機が見られる。



農業技術や
リーダー
シップ力を
伸ばすため
・
組織や
コミュニティの
基盤を強化
するため



草の根レベルの人々と共に働いていたことが、アジア学院に参加する一番の動機でした。今所属している団体に入った際、特に虐げられた人々と共に働けることに情熱を抱いていました。農業技術以上のことを学んで来られるように、所属団体が日本のアジア学院で学ぶ機会をくれました。研修内容は将来的に利用できると分かっていたので、アジア学院の研修プログラムにはとても参加したいと思っていました。

卒業生113番

研修プログラムの影響

アジア学院の研修プログラムが 学生や卒業生にどのように影響するか

研修プログラムの諸側面のうち学生と卒業生に役立ったあるいは重要だったもの、また卒業生が帰国後にそれぞれのコミュニティで利用できたものについてのデータ収集が行われた。学生は将来的に何を利用すると思うか、そして卒業生は学んだ技術や知識のうち実践できたものについて語った。

アジア学院の職員と相談しながら、回答を記録するための分類表を作成した。この分類表はアジア学院の研修プログラムの内容と優先項目に基づき、技術、知識、価値観等が含まれている。そして、

セクション1は農業技術の手法、セクション2は人に仕えるリーダーシップ、セクション3は研修の実践的な側面、セクション4はプログラムに含まれた様々な価値観が中心となっている。

セクション1では2013年度の学生が語った学びと人格の変化をまとめ、次のセクションでは卒業生が語ったプログラムの影響と卒業後に学びをいかに実践したかを紹介する。学生や卒業生の発言やコメントは引用に際して編集および要約をおこなった。

① 学生への影響

2013年度学生の報告による学びと人格の変容

学び

2013年度の参加者に対して、研修開始時、研修中、研修後の3回にわたって、何を学びたいか、実際には何を学んだかを質問した。大半が、予想した事柄の学びに留まらず、想像を大きく超える学びがあったと語っている。

最終的な聞き取りでは、技術、知識、価値観のうち役に立ったもの、重要だったもの、意義深かったものについての追跡調査が行われた。図1は、この2013年度学生の学びを追跡したものである。

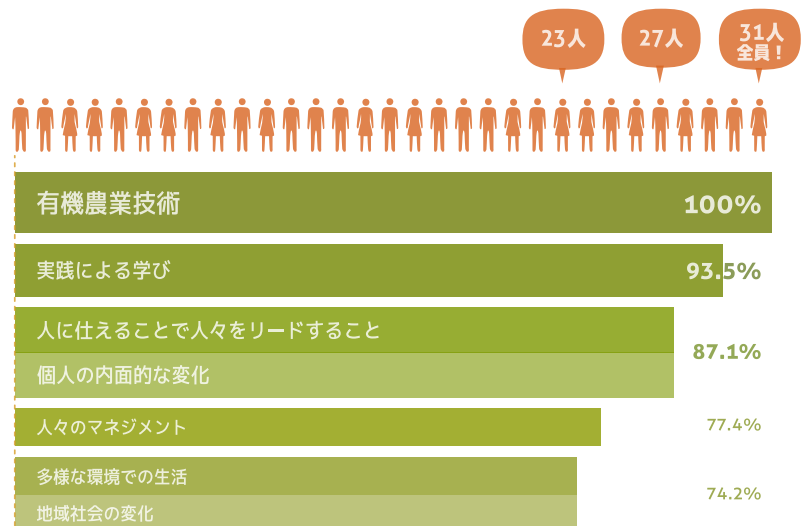
そのうちの過半数が有機農業、農業技術、リーダーシップの技術や知識を伸ばすことができたと言っている。研修開始前には理解しにくかったであろうアジア学院の価値観に直結した学びについて語った人もいた。中心的な価値観を追跡しようとしたが、言語能力の差や用語の微妙なニュアンスの違いなどもあり、難しい作業となった。

期待される学びの活用

聞き取り調査の最後に、31名中29名の学生が、有機農業技術の使用や共有、食品加工、参加型手法の導入、地域資源の利用、虐げられた人々に仕えること、農業の危険についての啓蒙、女性にかかわる諸問題等、帰国後に実践したい例を少なくとも一つはあげていた。話に挙げた実践可能な様々な計画を見てみると、教育プログラム、農業プログラム、地域共同体開発プログラムの3つのテーマが浮かび上がってきた。多くの学生が帰国後にそれぞれの地域社会で学びを実践に移す意欲を持つと同時に実践に際する懸念についても語っていた。

図1：何が役立ちましたか？

2013年の学生が聞き取り調査の最終面談で報告した学びの上位5つ





フードライフ
アジア学院では全員が
食物連鎖のあらゆる
面に参加している

いに学びました。人に仕えるリーダーシップという手法を知って私は完全に変わりました。職員も常に仕える指導を実践しています。人に仕えるリーダーシップが、単に教えられ学ばれる事柄ではなく、日々実践されているからです。全ての人々が平等です。差別はありません。このこと自体を初めて学びました。キリスト教徒として「人に仕える指導」という言葉は知っていましたが、実際にコミュニティで実践されているのを見たことがありませんでした。しかしアジア学院では、この言葉の本当の意味が分かるようになりました。」

学生たちは、人に仕えるリーダーシップというこの手法が、コミュニティを構成する人々の大切さや、指導する際に人々と共に働き人々のニーズを中心に考えることの必要性を反映していること語っている。中には学生 18 番のように、謙虚で、良い聞き手となり、協働することが重要だと分かったと語る人もいた。「私の考え方は大きく変わりました。人々に人に仕える指導者とは、コミュニティの中にいて、人々の声に耳を傾け、人々にとって何が必要で何を欲しているかを尋ね、この積極的な交流の結果に基づいて対応する存在なのです。」

学生 3 番、7 番、14 番は、研修の前と後の変化についてこう話している。学生 14 番によれば、「以前は、プロジェクトがある際に村を訪れていました。(中略) 村の人々は務めを果たしますが、私は何もせずただ座っているだけでした。村の人々が料理を作り、私はそれをただ食べました。帰国したら、全てみんなと一緒にしようと思います。トップダウンのやり方ではなく、共に分かち合うようにというのが私の今の考え方です。私は変わりました。」

学生 3 番はまたこう説明している。「自分の行動を変えたいと思っています。私もまた独裁者のように振る舞っていました。以前はよく『何も知らないくせに』『私の指示を仰ぎなさい』等と言っていましたが、今はそうした言動は間違いだったと思っています。今は、多くの人と話をし、その際には自分からはあまり話さずに相手の話をよく聞くようにしないといけないと分かっています。アジア学院のやり方を練習しています。もっと分かち合い、自分自身と自分の行動を変えたいと思っています。」

学生 7 番は人格的な影響についてこう話す。「アジア学院に来る前の私がどんな人間だったかからお話しましょう。たくさん勉強してさまざまな研修やワークショップに参加したおかげ

人格の変容

2013 年 11 月の最終的な聞き取り時には、全学生に対して、4 月の開始時から自分自身に変化があったかを尋ねた。その結果、31 人中 30 人(97%)の学生が自らの人格に変化があったと認め、それはアジア学院内外での経験によるものだと答えている。技術や知識における成長について答えた人もいれば、価値観や考え方における成長について答えた人もいた。

ここでは、プログラムが各個人に及ぼした影響を以下のように分類している。

フードライフ 生活の全ての面に関わる食物サイクル

学んだこととして大半の人が農業技術をあげていたが、技術習得自体が人格的な変化に直結しているとは感じていない。これは、アジア学院では、自然で持続可能な農業技術を価値観の成長へ導く導管のように使っているせいかもしれない。

フードライフの価値に関しては、地域資源評価、最大限の再利用とリサイクル、持続可能な開発、自給自足の促進等と関連して語られていた。地域コミュニティに何が足りず何を外部から得る必要があるかという視点で見ていた多くの人々が、コミュニティには実は何が既にあるのかと考えられるようになったことはとても意義深い。

学生 17 番は、特に土壌や時間の使い方のような、見落としがちだったり当たり前だと思いがちな資源についての考えをこう話している。「みんなに聞いてください。きっと同じことを答えるでしょう。私達は貧しいけれど、豊かでもあります。土壌は豊かですし、土地もあります。問題は人々の時間の使い方なのです。」



フードライフ 生活の全ての 面に関わる 食物サイクル

人に仕える 指導者 仕えることにより 指導する

多様な環境で 尊敬の念を育み コミュニティ づくりを行う

グローバルな (世界規模の) 課題とローカルな (地域特有の) 課題とを繋げる

男達は早朝から夜 10 時や 11 時まで働きます。周りからは貧しいと言われるのに、なぜこんなに時間を無駄にしてしまうのでしょうか。私達には時間管理、リーダーシップ力、持続可能な農業としての有機農業が必要です。人々がこれらを理解できれば、私達も発展できるのです。」

人に仕える指導者 仕えることにより指導する

2013 年度の学生の 87% が、何が人を指導者たらしめるかという考え方の進化を含む、人に仕える指導の手法、指導技術、指導の種類等をあげている。大半が、実際に指導をしたり、アジア学院で実践されている人に仕えるリーダーシップを模倣することで学んだとも語っている。

学生 30 番は、中間聞き取りの時点ではアジア学院の手法に批判的だったが、人に仕える指導に関して学んだことをこのように話している。「指導者は指揮官ではなく人々に仕える存在です。人に仕える指導者という役割について、アジア学院で難しい課題を与えられ大



げで、より良い指導者になれたと思っています。そして以前は、指導者の主な仕事と言えば、指示を出し任務を与えることだと思っていました。しかしここでは、指導者は前面に出て他の人々と一緒に働いています。ここでは指導者も皿洗いやトイレ掃除をするということにショックを受けました。奇妙に思えたからです。しかし校長先生にできて私にできないことがあるでしょうか。私の地域の住人が新しい私を見たら、ここでの私と同じような反応をするでしょう。」

多様な環境で尊敬の念を育み コミュニティづくりを行う

2013年度の学生の半数以上（55%）が、アジア学院の多様な環境に関連した人格的な変化について話した。研修を通じて学んだこととしてよくあげられたテーマには、相互理解の重要性や、異なる意見や考え方を持つ他者に対してもっと我慢強く接して受け入れること等があった。それぞれの文化的な背景に基づいて異なる意見があることが分かるようになり、学生同士がお互いから学べるようになったと言う人も数名いた。また、研修開始当初には難しく感じていた互いの違いも、積極的に話を聞き対話を持つことで乗り越えられ、その結果、寛容、理解、受容、尊敬、協力等が生まれた。

学生16番と9番は自分達の経験と将来的にあり得る利益についてこう話す。

学生9番「（ここアジア学院では）お互いを理解しようとする。私達の出身コミュニティでも、人によって異なる感じ方や人生に対する見方があります。ここで学んだことは、こうした意見の異なる人々をまとめる方法のひと

つとして役立つと思います。畑の管理についての議論がありましたが、これに関しても良い計画を練りうまく実行できています。出身国の教会では議論になるのを非常に恐れたこともありました。しかしこれからは、人々が自分の気持ちを表わしたり他人の気持ちに気付けるように、議論を許したいと思います。誰にでも自尊心やプライドがありますから、黙っているよりは議論した方が良いと思います。議論をすることで互いの距離が縮まると思いますから。」

学生16番は「故郷では、知らないヒンズー教徒やイスラム教徒に話しかけるのは難しいことがよくありました。しかしアジア学院では、誰もが分け隔てなく受け入れられています。それによって、私の人生が変わりました。あらゆる宗教を理解するようになったのです。他の宗教の人々を蔑んではいけないと思うようになりました。他の宗教や信仰の人々と話す機会があれば、そうした経験は地域共同体の開発に役立つでしょう。」と言う。

研修で教わった非暴力コミュニケーションと紛争解決の技術を用いながら積極的に耳を傾けることで、アジア学院の学生たちはお互いをよりよく理解できるようになっている。学生5番は自身の態度の変化についてこう語る。「いままでより忍耐強くなりました。私の弱点はすぐにかっとなってしまふところで、相手の態度が良くないとすぐ怒っていました。しかし今では大いに変わり、周りの人々との接し方も良くなりました。怒らずに相手の態度を理解することです。色々な人々への説明の仕方も学びました。人はそれぞれ違いますから、そうした違いに敏感でなくてはいけません。また、お互いを理解するためには親しくなることが必要です。」

アクティブ・リスニング

様々な国の人々とのコミュニケーションによって、忍耐力や理解を育てる

また学生たちは、違いは弱点であり紛争の種類であると思っていたが、見解の違いがあることでコミュニティが強化できて新しい考えや資源をもたらすという考えに変わったと語っている。学生34番は「私の考えは変わりました。今では、他人や他人の意見を受け入れ、（必要なことを達成するために）最善の考えや最適な方法を話し合いたいと思っています」と言う。

学生29番は、研修は「異なる人々との人間関係や違いの受け入れ」の仕方に影響を与え、「相手との適度な距離の作り方も学びました。これは口で言われるだけでは分らなかったと思います。他にも、問題解決にはさまざまな方法があることも学びました」と語った。



学生3番
自分の行動を変えたいと思つています。相手の話をよく聞かなくてはいけないと分かっています。

グローバルな課題とローカルな課題を繋げる

学生の中には講義、ワークショップ、日本各地への訪問見学を通じて、グローバルな課題とローカルな（地域に根差した）課題との理解を深めたという声もきかれた。研修旅行、ホームステイによって、ホームレス問題、水銀公害、鉱山の影響、自殺や高齢化などの地域社会の社会問題等に触れることができたと言う。経済発展の弊害を目にして驚いた人も多く、学生7番はその大きな驚きをこのように語っている。「日本の人々が直面している課題も見ることができました。ホームレスの人も見ました。西日本研修旅行中にはハンセン病患者がどのように扱われているか、そして水俣病についても学びました。日本の抱える課題の一部を垣間見てとてもショックでした。」

実施計画

自分たちの卒業後の計画を発表する



創立 40 周年記念

2013 年 9 月、アジア学院創設以来の
58 人の卒業生が記念式典に参加、話の花が咲いた



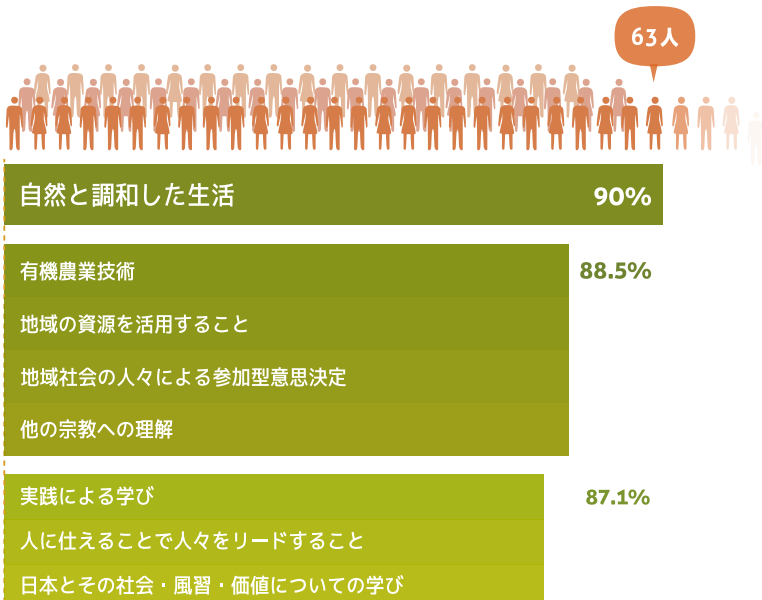
②

卒業生への影響

図 2: 卒業生が学びの上位にあげた事

2013 年のアンケートで、卒業生に学びの
上位 3 つをあげてもらった。以下は学びの
内容として上位にあげられたものだ。

アンケートの母数: 70 名



研 修の評価チームは、卒業生たちが学んだことに関する情報を収集した。そして、個々のデータ収集方法によって、研修の影響の実態が把握できた。アンケートや聞き取り調査、現地訪問などの結果、約 80% (母数 124 名) の卒業生が、自分が学んだ技術のうちで最も重要なものは、有機農業技術やリーダーシップだと回答した。

アンケートでは、学んだことの上位 3 つは何かを卒業生に聞いた。また、あらゆるデータ収集の方法で、学んだことで国に持ち帰り利用できるものは何かについても聞いた。プログラムの個人的な影響については、多様な背景を持つ人たちが集まる地域社会での経験によって考え方や価値観が変化したり、そうしたことが結果的に行動の変化につながるものがよくあったと、卒業生の多くが語った。また、アジア学院での研修が自分の仕事にどのような影響を与えたのかについての具体例を話すように卒業生に依頼したことで、さまざまな内容の体験談を知ることができた。

このことから、卒業生の多くはフードライフや人に仕えるリーダーシップ、地域社会づくりといった価値観を自分の仕事に取り入れていることが明らかになった。卒業生の中には、農業技術を使い家族や地域社会が健康的な食べものを入手できるようにするというに言及する者や、組織開発や地域の人たちのニーズに応えられるようになることに重点をおいた話をした者などがいた。

下記の例では、卒業生がアジア学院の研修によって影響を受けた方法を用い、卒業生が知識、技術、価値観を伝達することで自分の地域社会にどのような影響を与えているのかという 2 つの観点から、代表的なものを挙げる。卒業生たちには、アジア学院の諸原則とより広い課題である持続可能な開発や持続可能な地域社会づくりの両方に関連している自分たちの仕事について話し合ってもらい、たくさんのフィードバックが得られた。以下は、そこから分かったことの要約である。

フードライフ、農業、そして有機農業技術

卒業生は、アジア学院で学んだ、有機肥料や自然農業のつくりかたなどの特定の農業技術についての知識やそのさまざまな利用法について話した。家庭菜園や農場をつくることから始めた者もいるし、自分が働く組織を通じてモデルファームをつくることから始めた者もいる。また、地域の人たちや地元の農家の人たちに技術を伝えたり、他の農法を違うプログラムに融合させることを始めた者もいた。

農業技術

グループでの聞き取り調査では、たくさんの卒業生が、有機農業について学んだ技術は自分たちの毎日の仕事や地域社会にとって必要不可欠なものであったと回答した。卒業生たちは、この知識を使い自国での食料の生産性を改善することができた。35人の卒業生にオンラインによる聞き取り調査を行なったところ、そのうちの66%にあたる23人が農業技術に関連した知識を利用することを強調していた。また、57%にあたる20人が食料の生産と備蓄の統合について言及した。フィリピンにあるアジア学院同窓会（ARUGA）が2014年4月に開催した集まりでは、ほとんどの卒業生たちが、自分が使える農業技術や知識の情報を伝え合っていた。児童養護施設や教会、学校などで働く卒業生には、持続可能な農業技術を利用して、そうした場所での健康的な食物の入手や食料の自給自足を促進していると話した者もいた。

卒業生34番は、アジア学院に行くことで自分の物の見方や農業のやり方がいかに変わったかについてこのように説明した。「私が所属するのは農業を基礎にした組織ですので、この研修は役に立ちました。初めのうち、私は農業を商売だと考えていました。人口が増加していて生産物が不足しているのなら、生産を増やせばいいという発想で、肥料を使うことばかり重視していたのです。しかし、アジア学院に行き、そうしたやり方では自然の恩恵は得られないと実感しました。肥料を使い過ぎれば、万物の法則が壊れてしまいます。それからは、農業や化学肥料の使用を変えました。今では、自然の法則に従った無理のない考え方で農業をしています。」

フードライフの価値

フードライフのサイクル全体を理解しそれに直接参加することは、卒業生に大きな影響を与えた。卒業生の多くは、食物に対する新しい見方と、それに対する接点を見出すことを学んだと話した。たとえば、オンラインによる聞き取り調査を行った35人の卒業生のうち約3分の1が、地域社会をひとつの集団にまとめあげてやる気を起こさせる方法のひとつとして、フードライフについて明確に話していた。卒業生75番は、地域社会を全体として1つに集結させ、育った農作物をみんなで分けたりグループで食事を用意するなど、農業に関わってもらうことがいかに地域共同体の開発促進に役立ち、食料問題と奮闘している地域の人々の間で一体感を育くんだかという事例を紹介してくれた。

卒業生21番は、フードライフの性質を他のさまざまな重要な問題との接点点として、このように述べた。「私が所属する地域社会では、約80%の人たちが自分の食物を自分で生産しています。フードライフというのは、生命が食物に依存しているということです。ですから私たちは、人間に食物をもたらす環境を維持していかなければなりません。今私たちは、環境や農作物にダメージを与える行動を変えて、持続可能性を促進しようと取り組んでいます。そこで、有機農業を広めているのです。私たちはお金を稼ぐ必要があります。そして、食物を育む土壌を維持することも必要なのです。」


実践的な管理スキル

多様な文脈においてすぐ適用できる役に立つ学びとして多くの卒業生があげていたのが、時間管理や計画立案の技術だ。こうしたものは、日々の農場での作業やプログラムの計画、農場の管理、教室でのやり取りなど、アジア学院での毎日の厳しいスケジュールを通して得られた。また、多くの学生が、帰国する際には時間に対する概念や使い方を変えようとしたが、その思いとは裏腹になかなか上手く実践できなかったと話した。卒業生たちは、時間の価値を正確な計画を立てるのに不可欠なものと考えていた。

卒業生57番はこのように説明した。「時間の価値を知った私は、アジア学院の研修から戻ると、組織の中で一番スケジュールを守る人間になっていました。これが、私の人生、組織や社会、そして家族にとっての変化です。」

地域資源の利用および適用法

卒業生たちは、地域資源を見つける力が養われたことや、地域の外にある資源に重点を置いてしまうと他に依存するようになって持続可能でない不健康な習慣に陥りかねないことを理解するようになったという意見を述べた。アジア学院で学ぶ前は地域社会にある資源が分からなかったが、今では隠れている地域資源の存在にまで気がつくようになったと詳しく語ってくれる卒業生もいた。これは、自分たちの地域にはなく、他の場所から入手しなければならない資源に注目するのではなく、自分たちの地域にある資源を新しく活用するという考え方の転換を表している。卒業生67番はこのような話をした。「私は地元の人たちに、食事のときは全ての食物を残さず食べるように、それでも残してしまう場合には明日またそれを活用するようにと教えています。使えない状態になっていても、堆肥にする容器に入れば、後で肥料として利用できます。それはリサイクルに関しても、紙、缶、ビンなど、あらゆるものにはそれぞれに適した場所があるということです。これも、私たちがアジア学院で学ぶ方法です。」


主なテーマ
 農業技術
 ・
 フードライフの価値
 ・
 実践的な管理スキル
 ・
 地域資源の利用および適用方法
 ・
 労働の尊厳と農村生活の価値への気づき
 ・
 モデル・ファーム
 ・
 持続可能な環境保全とそれに関連する課題
 ・
 地域密着型の研修

(左)地元の女性に有機農業技術を教える、ベピチャ・マングスタパン(2006年)(インドのマニプール)

(右)学校の子どもや先生らとのプロジェクトに取り組む、マルタ・スィアニパル(2012年)と武野裕太(2012年)(インドネシア)





自分たちの農場の職員と共にトマトを栽培する、ジュディス・ダカ(2001年)とジョン・ニヨンド(1983年)(ザンビア)

労働の尊厳と農村生活の価値への気づき

農業や自分たちの手で食物を生産する価値の理解の一部として卒業生が言及しているのが、労働の尊厳と農村生活の価値だ。こうしたことは、自分の子供を都会の大学に入学させ大都市で良い仕事に就かせるのが良い生活だと考える多くの人たちが直面している都市化の圧力とは対照的なものだ。自分の手で行なう労働を違った角度から捉えなおすようになっている卒業生もいる。そうした者たちは自分の仕事を恥じるのがなく、地域社会に食物を提供するという重要な役割を担っていることに誇りを感じることができるのだ。卒業生 121 番は、作業着で農場に向かう自分の姿を以前は恥ずかしいと感じていたが、今は農家であることを誇りに思い、自分が学んだことを他の人たちと分かち合うことができると語った。

モデル・ファーム

多くの卒業生にとって、アジア学院は自国の地域社会に知識を広めるモデルとなった。よく使われる方法のひとつが、普及のためのモデルファームをつくることだ。卒業生たちの中には、自分の所有する土地を使って有機農業を実践し、持続可能性、農作物の品質、土壌の維持の観点から相対的な利点を実演して見せた。また、学校、教会、児童養護施設などの周辺の土地を利用した卒業生もいた。ほとんどの場合、最終的にはこうした取り組みに地域社会の多くの人たちが参加するようになり、デモンストレーション用の農場は、アジア学院での実地研修と同じような「農業を学ぶ場」として機能するようになった。

貧困状態の若者たちの中で働いていた卒業生 17 番は、NGO を基盤とする自分たちの普及用のモデル・ファームを始めた。そして若者たちは、技術的や人をやる気にさせる動機を他の若者と共有したり自分が模範例になることで、地域の一人ひとりに直接的で持続的な影響を与えることができた。

持続可能な環境保全とそれに関連する課題

それぞれの学びの関連性を議論しているときに、多くの卒業生が話したのは、自然と調和した生活を心がけ、環境をより尊重するようになったということだ。卒業生 21 番はこのように話した。『「自然と調和した生活」は、近年設立された市民環境団体のモットーによく使われています。私は、農業や焼き畑農業そして森林伐採の危険性について、地域の人たちに話すことができています。』

卒業生は、自分たちは農業で使われる化学物質の影響について、そして、化学物質が土壌や健康、環境に与える影響についての知識をどのように利用できるかを学んだと述べた。卒業生 82 番は、アジア学院での研修を行なう前の学生たちは「化学物質の危険性を知りませんでした。アジア学院に参加した後で私は、化学肥料や農薬を使わないように心がけていました。また、年に約 20 回のセミナーを計画して、化学物質の危険性を知らせました。」と語った。

多国籍企業と GMO (遺伝子組み換え作物)、有機農業と健康的な生活、健康と栄養、貧困とグローバル化、飢餓と農業政策、そして災害や気候変動など、いろいろな課題の相互の関連性についてのさらなる理解を得たということ話をした卒業生もいた。さらに、自分が学んだことを活用してより広範囲の課題に取り組むことができた者もいた。卒業生 77 番はその方法についてこう語った。「アジア学院に行ったことで、広範囲の課題や国内外の課題についての自分の考えに自信がもてそれを話す勇気を持てるようになりました。そして、そのおかげで、政策変更が成功しました。それには、食物を生産する土地を手に入れること、権利を持たない土地に依存して生活すること、あるいは生活権を強化する方法など、たくさんのものがあります。」

卒業生 4 番は、「農村のリーダーシップの促進、小作農家の権利、消費者の権利といっ

たものと、地域資源を活用して持続可能な生活スタイルを生み出すこと」の関連性を理解することが大切だと説明した。

地域密着型の研修

自分たちの「小型アジア学院」研修センターといわれるものをつくり、この研修プログラムを違ったレベルに発展させたことについて詳しく話してくれた卒業生もいた。こうした地域密着型の研修は、それぞれの内容は大きく異なっていたが、環境教育、マイクロファイナンス、所得創出、金融リテラシー、職業訓練、そして農業技術など特定のテーマが設定されている。多くの卒業生が、アジア学院の社会正義という価値観を自分のものとし、技術の向上と共に参加型の方法を用いるようになった。

プログラムの中には、女性を対象とし、彼女たちが家庭菜園で有機農業を行うことを促進するのを目的としているものがある。それによって、家族に健康的な食物を食べてもらうと同時に、家庭の収入を補足するのが狙いだ。そうしたプログラムでは、地域の女性たちに技術を伝えることを重視し、技術指導から始めるものもあるだろう。しかし卒業生たちは、これらのプログラムを、地域の人たち、とりわけ女性たちに食物や収入そして生活をより管理できるようにさせることで、自信を持ってもらうようにする試みであると捉えていた。卒業生 1 番も、農業や家畜に関する研修は自分の自信のひとつの源になっていると述べた。「最近私たちは、農村の女性たちのグループを手伝いました。彼女たちは数千羽の鴨を飼育・販売して、生活の安定と家族の収入を向上させました。現在では、彼女たちは経済的に独立してかなりのお金を稼いでいます。そして、そのお金の使い道も自分で決められるのです。」

卒業生 110 番は、研修対象が広がる中で、異なる人たちにどのように技術を伝えたのかについて話してくれた。「私は、農民や女性だけではなく学生たちにも技術を伝えています。地元にはカトリックの学校がたくさんあります。私は、学校のカリキュラムに有機農業を取り入れたらいいと思ったのです。私の国では K-12 という教育制度を採用していて、生徒は技術の科目として農業や溶接などを選択できるようになっています。そこで、学校で有機農業を取り入れるのは教育的にいいことだと牧師や聖職者の人たちに話したのです。」

多くの卒業生にとって、農業技術の向上・開発、持続可能性や知識の啓発等は、フードライフの価値と共に、アジア学院での研修におけるそれぞれの側面と結びついて各自の毎日の生活の中に一体化されている。

卒業生 77 番の「アジア学院に行くことで、国内外の課題について自分の考えに自信がもて、それを話す勇気を持てるようになりました。」

人に仕える指導者

人に仕える指導者(リーダー)の形成は、アジア学院研修プログラムの中でもっとも影響力の大きいもののひとつだ。人に仕える指導者という考え方において、卒業生たちはリーダーとは何か、どう導くべきかという考え方だけでなく、自分自身のリーダーとしての役割認識、地域の人々の重要性、地域社会への直接的な働きかけによってリードする必要性について、これまでの考え方を改めた。



リーダー観を変える
(命令者から
ファシリテーターへ)

奉仕による
リーダーシップ/
模範を示すリーダー

草の根レベルで
活動し、地域の人々の
声を聴く

「人に仕える
リーダーシップ」
の導入における課題



リーダー観を変える (命令者からファシリテーターへ)

多くの卒業生は研修以前にリーダーについて話すとき、次のような言葉を使った。「命令する人」、「威圧的」、「独裁的」、「高い位」、「オフィスにいる存在」で自分の手が汚れるようなことはせず、「下の人」に直接関与しない。ところが、アジア学院での研修を経ると人々のリーダーシップに関するこうした考え方は一変した。命令者からファシリテーターへの変遷は時間がかかり、最初は抵抗を覚える者も少なくなかった。これまでの独裁的なタイプのリーダーとは異なる、地域社会に直接関与し、一緒に動くファシリテーターとしてのリーダーを学生は徐々に理解するようになり、リーダーの持つ技術・態度・影響力の相違を理解するようになった。ファシリテーター型のリーダーも、指示や技術、ビジョンを示すことが必要であるが、同時に謙虚な良い聞き手として積極的な態度で、他者が自身の解決策にたどり着く手助けをする必要がある。

リーダーは、追従者に行先を命令する人とは違い、水先案内人となって様々なルートに光明を投じるのだ。こうした認識の変化は奥深く、長期的に影響を与える。卒業生 79 番と 125 番の報告にはこうある。

卒業生 79 番「かつて、わたしは傲慢な上司でした。することといえば命令、要求ばかりで、何もませんでした。それが完全に変わったのです。他者のための模範となりました。…みんなが私を理解してくれます。今や私は人々の役割や意見を取り入れるようになりました。チームワークが向上したのです。…他の人に権限やチャンスを与えています。100パーセントとは言えないとしても、良きリーダーとして全力を尽くすのです。そうすれば必ず大きな変化が生まれるでしょう。」

卒業生 125 番「それまではミーティングを開くと私だけが話す、いわゆるワンマン状態でした。それがアジア学院で学んだことで…独断ではなく学生の合意をもたらすこと、そして誰もが学び、意見や感想を述べる機会があるミーティングに変わったのです。」

奉仕によるリーダーシップ/ 模範を示すリーダー

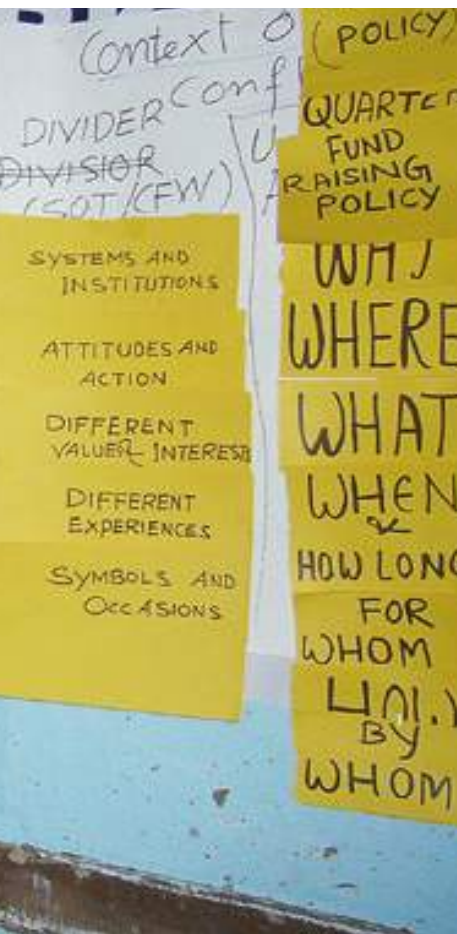
アジア学院の校長や他の職員たちと共に働き自ら手を汚して人に仕えるリーダーシップの姿は、卒業生の心に残ったと報告されている。卒業生はリーダーが自分自身を地域社会のどこに位置づけるかということと、リーダーの影響力や人々にどう認識されるかが、関わっ

ていると理解できるようになる。リーダーシップスタイルの変化により卒業生たちは地域社会により上手く溶け込み、地域の人材として活躍することを可能にするのだ。

卒業生 100 番は、人に仕えるリーダーシップの実践について次のように話した。「自分を変えました。地域社会に仕える一員としてどう働くか考えると…私はリーダーであると同時に、地域社会のための奉仕者でもあるのです。」

卒業生 40 番は、初期の卒業生に共通する記憶を感想として述べた。「早朝、高見敏弘先生がトイレを洗っていました。この光景は強く記憶に残りました。これはまさに、行動で見せるリーダーシップだと。リーダーシップについて口先で語るだけではなく、実際にやってみせる。仕えるリーダーであり、労働者であり、そのあり方を示すということ。高見先生は、はっきりとそれを体現してくださいました。私たちは、教えていることを行動で地域社会に見せなければなりません。教えるだけでなく、実際に言っていることをやって見せる。共に学び、働く。命令をするのではなく、召使いに仕えてもらうのではなく、自分自身でやらなければいけないのです。これは我々の責任であり仕事です。だからやって見せましょう。このことが私が学んだ教訓の一つです。」

卒業生 85 番
「これは、これまで私たちが地域社会の提案を聞いて検討するということではなく、人々の意見を聞き人に仕えるリーダーシップ研修に則り、人々の意見に耳を傾けています。」



市民団体向けの
能力開発ワーク
ショップにて
指導する、
ベビチャ・
マングスタパン
(2006年)
(インドの
マニプール)

灌漑システムや
トイレを設置する
ために地域住民
と話をし、
ラトナ・パラサド
・サブコタ
(2005年)
(ネパール)

草の根レベルで活動し、 地域の人々の声を聴く

アジア学院では、参加型の意思決定と地域の人々に直接働きかけることを強調している。卒業生は、言語能力や能動的に聴く力、他者への思いやり、様々な人と接するための多様な手法といった貴重なコミュニケーション技術の発達についてポジティブな感想を残している。そのほかの学びとしては、新しいアイデアによりオープンになること、より良いファシリテーターになること、交渉や他者を説得するのがより上手になったこと、より多くの意見に耳を傾けることなどが挙げられた。多くは、偏見を持たずに広い心で人とつながることで、多様な聴衆とコミュニケーションができるようになる技術を評価している。自分の地域社会に戻ると、多くの卒業生はより集団的意思決定をしようと試みた。

卒業生 13 番はこう感想を述べている。「アジア学院ではたくさんの活動があります。学院の協働作業、参加型学習、…それらから、良きリーダーになる方法を私は理解しました。自分自身の立場だけで決めるのではなく、人々の意見を聞き、共にアイデアをつくり、実践するのです。」

卒業生 85 番は、現在の活動について次のように述べた。「これまで私たちは地域社会の提案を聞いて検討するというようなことはありませんでした。今は、人々の意見を聞き人に仕えるリーダーシップ研修に則り、人々の意見に耳を傾けています。」

卒業生 31 番はアジア学院に来る前と後とを対比し、こう記した。「アジア学院に来る前、意思決定をする際は私が最終決定を出していました。ほかの意見は聞きませんでした。しかしアジア学院での研修の後は何かを決める際は私はスタッフと座って一緒に議論し、人々の考えを聞きます。これらを通じて集団的に最終判断をするのです。私はいろいろな意思を取り入れるよう、いつも努力しています。」

多様な背景をもった卒業生たちは、これまでの手法を変えたことについて次のような感想を記している。卒業生 108 番はこう話した。「それまで、私は自分ができることだけに集中して地域の人々のニーズに気づくことができませんでした。今は、地域の人々から始め、地域と共に計画し行動するようになりました。」

卒業生は、地域の住人との関係性の中で自分自身や他の人々に対する認識に変化があったことも強調している。このことで卒業生たちは、地域社会によりうまく溶け込み、地域の人材になっている。

「人に仕えるリーダーシップ」の 導入における課題

多くの卒業生は、人に仕えるリーダーシップを自身の地域社会で応用することに課題を感じたとしている。卒業生 28 番と 92 番は、学院の外では使えないと話しており、卒業生 123 番は先住民に対する活動の際には応用できないと話した。

導入における困難としては、地域社会においてリーダーに期待される意識に差異があることを挙げている。ある卒業生は、地域の人々が「リーダーとはいつも誰かに仕えられる存在だと考えていたため、衝撃を受けていた」と話した。こうした反応は例外であるが、新たなリーダーシップ手法を導入するにあたる課題の一つと言える。

多くの卒業生が人に仕えるリーダーシップについて、着手するのが難しい、またはゆっくりと時間をかけて導入する必要があると話した。また、様々な集団や利害関係者との活動に価値ある学びや意義を感じたと話した。卒業生自身も 9 か月間のアジア学院研修によって変わったように、行動や考え方を变えるのには時間がかかる、と何人かの回答者は話した。卒業生 11 番は次のように記している。「もちろん、簡単ではありませんでした。ほかの人を完全に変えるということはありません。困難もありますが、プラスのこともあります。ほかの人たちと協力する方法について分かるようになります。自分たちのアイデアを提供したりね。教えるのではなく、共有することが大事なのです。教えるだけでは、人々は何が必要かを知ることはできません。人々と一緒に、いかに働くかを分かるようになる必要があるのです。」

多くの卒業生は、牧師、農業指導者、地域社会のオーガナイザー、国際開発事業の職員などといった多様な背景を持っていたが、人に仕えるリーダーシップの実践や価値観が地域の人々のモチベーションを高めたり、組織化するのに極めて重要だという事が分かった。卒業生たちは、意思決定の方法を変更することで所属する組織の在り方を変え、より包括的で様々な利害関係者間におけるオーナーシップ(自分自身の課題として捉えること)を向上し、職員や関係者の技術を高めるようになった。



環境教育ワークショップで若者と活動する、
ジョイフェル・レソール(1990年)(フィリピン)



スチュアート・センパラ(1994年)は村を訪問して、安い労働力として利用されている孤児たちを見つけ出している。少年が労働から解放され学校に行けるよう大人たちに促している様子(ウガンダ)

地域社会づくり

地域社会づくりはアジア学院の使命であるとともに、フェツァー研究所の焦点である平和、愛、理解の構築に関係する重要なテーマである。卒業生たちはしばしば、多様な地域社会の環境が自分たちの認識や行動に直接的な影響をもたらしたと話しており、多くが、地域社会づくりにおいて、互いの相違を尊重することと人に仕えるリーダー研修との関係を強調している。



寛容性
(理解、受容、尊重)
を高める
・
宗教を超えた環境

虐げられた
人々に仕える
・
平和や愛、
赦し

寛容性(理解、受容、尊重)を高める

卒業生は、アジア学院研修プログラムにより多様な宗派や宗教、言語、文化に触れたことをよく評価している。自分の意見や経験、アイデアを発言するといった日常の経験を通じて卒業生は考え方が変わり、他者との関係を構築するために一度立ち返り、忍耐をつけ、謙遜する必要があることを認識した。

アンケート結果だけでも、卒業生の6割がアジア学院で社会的文化的に相違のある人々と接した経験が、卒業後、他者との相違を尊重し、他者をより理解するのに役立ったと答えている。ほとんどの聞き取り調査でも、卒業生は様々な人々と活動したことによる学びや個人的な影響力について、相違を理解し受け入れるようになったことを言及している。こうした経験により、卒業生は偏見や先入観を取り除くことができたと言える。卒業生24番は、それまでネガティブなイメージを持っていた国の出身者と同じ部屋で過ごしたことで、不安を克服し、他者と共に働くということに対する考え方を改めたと話した。

卒業生21番は、アジア学院の生活環境が与えた影響について次のように紹介している。「こうして私は、分かち合うということを理解しました。—それはアジア学院での主な活動の

一つでした—知識を分かち合ったり、経験を分かち合ったり…。ここに来た人々は多様な社会的背景を持っていますが、私たちは自分たちを理解し、自分たちで自分たちの問題を解決し、お互いの文化を尊重しました。いろいろな文化的背景の人たちと共に働き、その人たちの文化を尊重するのです。」

卒業生95番は、「幅広くたくさんの人と一緒に活動するにはどうしたらいいか、ということを学びました。一人で働くのではなく、色々な人がそれぞれ多くのことを学び、何でも学んでみるということが奨励されました。上司と部下というように区別されるのではなく、あらゆるレベルで皆が友達になりました。」

多くの卒業生はこうした経験のおかげで、自身の地域社会に戻ってから、地域の人たちとの協働が強化された。フィリピンとスリランカの何人かの卒業生は、自国内の多様性とアジア学院での研修環境が非常に多様であったことを結び付けて考えることで、帰国後に様々な人と効果的に協働できるようになったとしている。

卒業生103番はこう説明している。「一番意義深かったのは多様性でした。人柄、世代、ジェンダーといったいろいろな異なる背景を持った人たちと共に学んだことで、視野が広がりました。また、地域社会形成についても



分かち合うという活動を理解しました。それはアジア学院での主要な活動の一つでした。
卒業生 21 番

視野が広がり、災害後の働きかけ方や、教区に奉仕することの意義を理解するのに役立ちました。」

何人かは、座学ではなく、日常生活での実践がより大きな影響をもたらしたと話している。卒業生 89 番はこう話す。「私にとってアジア学院での生活は、私がソフトな部分と呼んでいる、雰囲気や、公正さ、尊厳を分かち合うことです。これらは体系的に名前をつけて学ぶようなものではありません。日々、実践するものです。」

習得した手法やソフトなスキルは、卒業生からよく感想に上っている。卒業生 66 番も次のように述べている。「ソフトな技術は、敬意とともに私たちをきっと向上させてくれるでしょう。ソフトな技術とハードな技術の両方が研修の一部を成しているのは … すべてに関係することだからです。違いを尊重すること … あらゆる状況で違いを認めることは大変重要なのです。ほかの人の文化を尊重したり、伝統や信条を尊重すること。そして相違の真価を認めること。こうした人々の相違を有難く感じる事が、アジア学院での研修の中核、真髓だと言えます。」

卒業生 46 番は、自分に変化をもたらした経験について次のように話した。「共に生き、お互いを理解し、赦しあう、愛のある前向きな暮らし方を育くむことができると感じました。人に仕えるリーダーは自ら謙遜し、他の人のために仕え、他の人と同じ目線で共に働けるリーダーです。これは物理的に腰を低くすることではなく、精神的な謙遜です。肉体が苦勞するとき、精神が育つのです。」

卒業生 5 番と 52 番は、特にお互いを平等に見つめることについて言及している。卒業生 5 番によると「あらゆる文化や部族、宗教を等しく尊敬することを学びました。」

卒業生 52 番「いわゆる『先進国』の一員であるか『途上国』の一員であるかどうかは構わない。平等性があるのです。私たちはみな、創造主が与えてくださった豊かな恩恵をありがたく受けとめ経験する同じ人間です。ひとつのビジョンを分かち合うということが世界にとって価値あることなのです。」



地域の課題に取り組む方法を模索しようと、多様な宗教の指導者による月例会を開始した TLM マッキング (2002 年) (スリランカ)

宗教を超えた環境

アジア学院初期の卒業生はその多くが本学をキリスト教の団体だと認識していたのに対し、最近の卒業生は学びの中で、宗教を超えた、多様な宗教性の側面が重要であったと強調している。卒業生は、宗教的多様性が研修プログラムをより高度にしており、近年の世界情勢における緊張状態を見据えると、こうした多様性は研修の効果を高め、安定した地域社会づくりを拡大できる可能性があるとの意見に同意している。

多くの卒業生にとって、他の宗教や宗教を持たない人たちと知り合い、一緒に活動することは初めての経験であった。卒業生 3 番を含む何人かの卒業生は多様性のある国から研修に参加したが、アジア学院の宗教的多様性に最初は驚き、そして深い影響を受けたとして次のように話している。「アジア学院に行くこと、宗教に対して広く自分をさらすような経験がありました。私は敬虔なカトリック教徒なのですが、アジア学院に行ってみると、文化、宗教、人々が全く異なるところだったのです。中には宗教を持たない人もいました。だから私は変わり、もっとオープンマインドになりました。」

卒業生 67 番は、多宗教に囲まれた環境の大切さや、自らの地域での取り組みにそれがどう影響するかが重要だとして次のように感想を残している。「私にとっての二つ目の学びは、人々が調和の中で共に生活することで、宗教を持たない人、仏教徒、ヒンズー教徒、キリスト教徒、カトリック教徒など様々な人がいる中で、調和して共に礼拝する。神との関係における苦難を互いに聞き合いました。キリスト教徒が少数派であるわたしの母国でも応用すべきことがあると思います。日

本のこの小さなキリスト教コミュニティで可能ならば、私たちが違う文化から学んだり、違う言葉や宗教から学んで調和し共に生きることを実践できると思います。」

アジア学院卒業後に平和促進活動をおこなった卒業生 7 番は、意見の違いの大切さはアジア学院での研修のもっとも重要な側面だと捉えている。それは、違いを尊重することで地域社会は平和的な結束をつくることのできるからだ。「私たちの社会はいつも宗教という色眼鏡を通して物事を見ています。日頃平和に共に生活していても、お互いの文化や信条を 100% 受け入れているわけではありません。アジア学院では宗教や人種、肌の色といった違いを乗り越え、すべてを尊重することを教えてくれました。またタイやスリランカ出身の仏教徒の友達から話を聞く機会がありました。国家、宗教、信条、伝統の違いとともにお互いを尊敬するのです。共に食べ、祈る暮らしを通じ、わたしのエゴは溶けてしまいました。」

卒業生 26 番は、仏教徒、ヒンズー教徒、イスラム教徒、キリスト教徒との活動が帰国後に自身の仕事への見方を拡大したとして、こう話している。「完全に自分が変わりました。今はキリスト教徒のためだけに活動しているわけではありません。全世界のために仕えることができます。まるで雨が、この地球上すべてのものに恵みをもたらしてくれるように。」

わずかではあるが、精神的な成長についてオープンに議論する卒業生もいた。自身の信条を深め、または振り返る機会をアジア学院が与えてくれたと話している。また何人かの卒業生はアジア学院で学んだことを自身の宣教活動で、教会のプログラムと有機農業を合体させたり、少数民族の女性を動員したりするの活かしたと報告した。



今はキリスト教徒のためだけに活動しているのではなく、全世界のために仕えることができます。
卒業生 26 番

虐げられた人々と共に働く

社会正義に焦点を当てたアジア学院研修プログラムにおいて、困っている人や弱者への奉仕活動は本質的に重要な部分を成している。卒業生の半数以上がこうした人々への奉仕活動を優先したとしている。卒業生 18 番は、帰国後に虐げられた人々と活動を具体的な焦点として、犯罪歴のある人に教育的展望を提供する活動を行った。卒業生 25 番は「低いカーストのヒンズー教徒ともっとも貧しいイスラム教徒の地域社会のための学校を始めました。同時に保護者向けの識字学習や、女性に小規模ビジネスを始めるための融資の提供を行いました。」と報告している。

卒業生 7 番は、自身の活動について起きた変化を次のようにコメントした。「近隣の虐げられた地域社会における貧しい暮らし（特に女性やアウトカースト（インドなどの身分制における最下位）の状況を目にしたあと3つの計画を考えました。① すべての子供たちへの教育、② 家族支援のための女性対象のプログラム、③ 公共病院での毎日の無料食事サービスです。」

人間関係において上下関係がなく平等であるアジア学院の環境が、自身の社会での現実に目を開ききっかけになったとして、卒業生 89 番は次のように話している。「みな兄弟であるという考え方や誰もが同じであるというアジア学院での考え方は、とても意義深いものであった。私の社会では上から下まではっきりとしたレベルがある。英語が話せる人は、ある社会的グループやカースト、階級に所属する、といったように何でも価値として位置づけられています。ところが、こうした考え方をアジア学院でそぎ落とすことができました。」

卒業生 30 番は人生の目的について深い内省をもたらしたとして、次のように話した。「他者に仕えること、社会的に放任された人々や忘れられた人々、権利を剥奪されてしまった人々のために結束し倫理的な活動をするところ、自分の存在意義だと理解するようになりました。」

平和や愛、赦し

ほとんどの卒業生は平和や愛、赦しといった言葉を具体的に使ったわけではなかったが、分かち合いや寛容性を高めること、相違を尊重すること、虐げられた人々に奉仕することといった議論のなかに包み込まれて表現されていた。社会変革活動に従事している多くの卒業生は、アジア学院で身につけた経験と知識が、世界中の人々との連帯意識を高め、エンパワーメントのための幅広い基盤をつくったとコメントしている。こうした経験は、卒業生がこれまでの自分の仕事の境界を越えて、持続可能な活動、理解、自身の地域社会における社会正義を促進する動機となっている。

”
他者に仕えること、
社会的に放任された人々や忘れられた人々、
権利を剥奪されてしまった人々や忘れられた人々、
結束し倫理的な活動をするところ、
自分の存在意義だと理解するようになりました。

卒業生 30 番



フェッツァー
研究所のテーマ

安定した住宅や土地所有権のために苦勞している地元の人々と働く、ムズング・ラファエル・ソゴマ (1990 年) (ケニア)



地域のシードバンク(種子銀行)を阻止してしまう種子法(Seeds Act)に反対するキャンペーンへの参加を地域住民に対し呼びかける、レヌカ・パドゥラカナンティ(2004年)(スリランカ)

自分たちの地域社会における人権を促進するためにリーダーの育成に取り組んでいる、バビチャ・マングスタパン(2006年)とサンギタ・デヴィ・コムナム(2013年)(インドのマニプール)





女性の技術開発を促進するための
シスター・ホーム・ラーニング・
センターを設立したシャニー・
チョウドリー(1995年)
(ナパール)

研修の幅広い影響

卒業生からは研修での学びを通じ、自分自身の内面やそのほかに関わる幅広い効果があったと報告された。そのうちの一部を次に紹介する。

ジェンダーや平等に関する理解の深まり

アジア学院における上下関係のない社会構造は、公平さやジェンダーの役割に対する感性を育む上で役に立つ。誰もが平等に参加できるという体験によって、男女を隔てる壁は曖昧になってくるようだ。多くの卒業生が、より包括的な考え方ができるようになったと話した。卒業生 31 番は、「女性や女性の価値観についてより深い理解が得られ、ジェンダーについての伝統的な見方をすることが少なくなったようだ。」と述べている。

卒業生 75 番は、このように説明した。「自分は、女性対象のプログラムや女性とたくさん話すことについてあまり関心がありませんでした。『女たちは何の話をしているんだ』と言ったこともありました。しかし、現在自分が所属している組織にはジェンダーに関する方針があり、役割分担や責任分担など、ジェンダーという概念を地域の人たちと共有しようとしています。そして今では、ジェンダーという考え方はプログラムの主要な構成要素です。」

男性が台所で料理をしたり、掃除したり献立を考えているのを見るのは、特に男性への影響が大きかった。それは、年齢や出身国を問わず、たいいていのがアジア学院の研修に参加する前には男性が掃除や料理をしているのを目にしたことがなかったからだ。卒業生

913 番は自分の経験をこのように話した。「一般的に、発展途上国で育つ男性は皿や調理用具を洗いません。私が住んでいる地域や私の家では、皿洗いは女性の仕事だと考えられているのです。しかしアジア学院では、誰が皿洗いをするかについて性別によって区別をすることはありません。また、皿洗いをすることで私は労働の尊さを味わうことができました。その経験があったからこそ、私は同じように皿洗いをしている職員を見るとより謙虚な気持ちになれるのです。この研修を受けたので、私はやる気になり、日々の生活を生きる強さを得ることができました。」

男性の卒業生のなかには、ジェンダーの平等は自分の国で改善していかなければならない問題のひとつで、アジア学院の研修に参加して初めてそれが分かったということを強調する人もいた。卒業生 79 番はこのように説明した。「妻と一緒に仕事を始めました。料理をしたり、庭の菜園で作業をしました。それによって家族の仲が良くなり、お互いのコミュニケーションも円滑になりました。」

卒業生 85 番はより広範囲の変化について言及した。「送り出し団体の事務所だけでなく、農場や家庭でも人に仕えるリーダーシップを活用することで、男性たちがジェンダーという考え方を認めるようになりました。そして今では皿洗いなどの仕事を引き受けてくれます。



主なテーマ

ジェンダーや平等に関する理解の深まり

個人の内的な成長

地域社会を超えた場での学びの実践

私たちは男性に、以前は女性たちだけがやっていた家事を手伝うように勧めています。」

スリランカ出身の 2 人の卒業生は、家族全員が参加できるプログラムをつくらうと意識的努力したと話した。卒業生 80 番が所属する組織では、より包括的な目的を持ち、女性というよりも家族全体の生活を向上させるプログラムを運営している。その組織の人たちは「家庭が幸せで平和なら、地域社会も幸せで平和である」という信念を持って活動している。「私は組織の人たちに男性、子供、女性を含むプログラムにするようにと仰いました。現在では夫夫妻の片方だけではなく、夫婦が共に幸せになっています。私たちの働きで、現在では夫たちの多くはとても幸せで、自分の家族を信頼しています。大きな問題はたくさんあります。そして私が 1990 年にアジア学院の研修で知ったいろいろな解決策はとても重要なものでした。私たちの家族向けプログラムは、現在ではバングラデシュはもちろんインドでも行われています。」

性別による区別を設けない制度は、誰もが容易に受け入れられるものではなかった。1970 年代生まれの女性である卒業生 91 番は、自分の経験をこのように話した。「初めの数日間は、食堂のようなところに集まってみんなで一緒に食事をするとき、私は汚れた皿が重なっている棚の下に座っていました。男の人たちと同席するのが嫌だったからです。いつも、男性を怖がっていました。国にいたときは、男性は信用できない存在だと思っていたのです。だから、男性の隣に座る気がしませんでした。」しかし彼女は、アジア学院での経験によって男性たちと仕事することに自信が持てるようになり、それが将来の男性の同僚との関わり方により影響を与えたと説明してくれた。

個人の内的な成長

このプログラムから得たことやプログラムに参加してどのような変化があったかについて尋ねると、自分の個人の内的な成長をあげる卒業生がしばしば見られた。そのようなことについてそれまではしっかりと考えたことはなかったが、アンケートや聞き取り調査は自分たちが得たことについて考えるよい機会になったと回答した卒業生がいた。一方でアジア学院の研修が自分の生活に与えた影響をすでにはっきりと自覚していた者もいた。多くの卒業生が触れていたのが、生活スタイルや物事に対する考え方の変化だ。たとえば、自

分に自信が持てるようになり、やる気が出て前向きになった、よりシンプルな生活スタイルを送るようになった、リスクを負えるようになったなどがあげられた。卒業生 89 番の両親は、娘がどれほど成長したかについてこのような話をした。「娘は、家を出発する時はまだ少女のようでしたが、戻ってきたときには世界に対する新しい視点を持ち自信に満ちた一人前の女性になっていました。」

個人の内面的な成長に対するアジア学院の影響力については、さまざまな体験談が語られた。以下で取り上げるのは、研修に参加する前後でどのような影響があったかという観点からの話である。卒業生 35 番「以前の私は傲慢でした。所属する組織で自分こそが最も価値があり重要な役割を果たして、自分の考えは正しいと思っていたのです。そして、能力や知性を重視していました。しかし、アジア学院で 9ヶ月研修を受け、こうした考え方が完全に変わってしまったのです。最も大切なのは、自分の物事に対する考え方が変わったことです。フードライフ、労働、評価、共同生活、日本人家庭へのホームステイなどを通じて、私のなかに変化が起きたのです。これはアジア学院の研修がもたらした最大の変容でした。同僚たちからも、私が変わったのが分かったと言われました。」

卒業生 113 番「アジア学院の研修に参加する前は、大勢の人の前に立つ度胸が全くありませんでした。組織にいるときは、若手の 1人に過ぎなかったのです。それまでは、組織の研修でも人前で話させてもらえず、書類作成ばかりしていました。アジア学院での経験で、本当に自分に自信ができました。」

卒業生 123 番「以前は、市長や村長といった政治的な指導者たちと対面する度胸がありませんでした。しかし、アジア学院の研修に参加してからは、そうした人たちと話す度胸ができました。そのことは私が自信を持つのに大いに役立ちました。」

地域社会を超えた場での学びの実践

国際的な開発プログラムやネットワークを通じて技術や知識そして価値観を共有することで、学んだことを自分の地域社会以外の場所で実践していると話した卒業生もいる。卒業生 16 番は、アジア学院で学んだことによって、地域においてさえ活動的でなかった人々たちを、国際開発の仕事に役立てるようになったと説明した。「地元の農家の人たちと話す場合に、基礎的な知識があると思われれば、信頼を得ることができます。私にそれなりの意見や知識の背景があると分かれば、より深い内容の話をしてもらえます。私自身そして私の仕事にとって、それはとても大切なことです。私自身の成果の為だけではなく、最終的にはそれが、農村地域社会の為にもなるのです。」

アジア学院で当初から使われていた方法の多くは、今では国際開発の分野ではよく見られるやり方になっている。卒業生 89 番はこのように説明した。「国際開発の分野は長い間に、従属型から慈善型そして参加型へと変遷してきました。そして私は、アジア学院で参加型や人に仕えるリーダーシップのアプローチを既に経験しています。みんなで参加型組織運営の話をした時のことです。同僚たちはそれを実現するのは難しいと思ったのですが、私はとても簡単だと思いました。また、同僚たちは参加型組織運営に対してあまり積極的ではなかったのですが、私はそれはアジア学院でやったことだと思っています。同僚たちはとても悪戦苦闘したと思います。従来のようなリーダーシップから参加型組織運営に転換するのは、私の所属する NGO の同僚にとってさえも困難なことでした。」

生態系に配慮して栽培された食料を使った多彩な食事へのアクセスを促進するグリーンピースのキャンペーンに参加している、アリエル・デ・ラ・クルース(2005年)(フィリピン)



ニューヨークで女性の地位の現状に関する国際会議に参加するノー・リー・ミャー(1998年、右)(ミャンマー)

研修プログラムの影響 についての総括的なコメント

見ると、卒業生たちがしている仕事は農業やリーダーシップの技術を直接利用しているように思われるかもしれない。しかし、卒業生たちの話を深く掘り下げていくと、持続可能性や地域社会づくりという側面、そして虐げられた人々に注目することは、「共に生きるために」というアジア学院の使命でありモットーとより直接的に結びついた、「価値に基づく学び」が反映されている。

これまで述べてきた卒業生たちの話から分かるのは、学生たちに大きな影響を与えたり、卒業生が技術に基づくプログラムだけでなく学んだ価値観を積極的に自国の地域の人たちとの分かち合いを実施する動機になっているのは、アジア学院の研修プログラムが持つ確かな価値基盤だということだ。卒業生たちからのフィー

ドバックによると、価値に基づく技術や知識を移転しようとする卒業生たちは、所属する組織や地域社会において大きな影響力を持っている。

全ての卒業生が成功を収めているわけではないが、こうした例は当研修プログラムの重要性を証明するものと考えられることができる。確かに、この評価は研修プログラムと地域社会の主な変化との直接の関連性を証明できるものではない。しかし、研修プログラムが卒業生の価値観や活動に大きな影響を与えていることが、この評価ではっきりと示されている。こうした価値観が各自の地域社会へ伝われば、各地での下からの変化を促し、相乗効果によってより広範囲な影響をもたらすことになるだろう。

帰国後に卒業生が直面する課題

変革を起こすのは容易ではなく、時間もかかる。ほぼ全ての卒業生が、帰国してコミュニティや組織に戻ったときに直面した課題について語っていた。個人的、組織的、そして自分たちのコントロールできない外部的な要因などが、問題として立ちはだかった。卒業生たちが直面する最も明白で直接的な問題が、逆カルチャーショックだ。その原因は、卒業生たちが創造的なコミュニティで9ヶ月過ぎた後で再び制約の多い状況に戻っていくためだ。

個人的な課題

個人的な理由としてあげられたものには、結婚、死、病気、妊娠、出産などの誰にでも起こりうる基本的な変化がある。卒業生108番は自分が直面した問題についてこのように話した。「まず、結婚が大きく影響しました。私が仕事をとても重視していたからかもしれません。それから、日焼けしたせいで綺麗でなくなりました。農業をするのは…とにかく、女性にはとても大変です。」

自分たちで新しい計画を始める元手となる資源がないと言っていた卒業生も何人かいた。卒業生104番は自分たちの体験をこのように話した。「帰国したときの問題は、自分がアジア学院で学んだ全ての内容をどのように実践していくのかということでした。意気込みはありましたが、土地を持たない状況でどのように始めたらよいか分からなかったのです。」

難しい組織的な状況

組織レベルで卒業生が学んだことを実践できるかどうかは、送り出し団体がどれ位アジア学院を理解しているか、またどれ程変化を受け入れる用意があるかどうかによると報告された。学んだことを自分の仕事にいかに取り入れることができたか語った卒業生たちもいたが、多くは困難に直面したと話した。卒業生103番は同じ国の人たちの経験をこのように述べた。

「帰国した卒業生の多くは、送り出し団体と何らかの対立がありました。研修から帰った自分の国の階級制度が、アジア学院で教えられた人に仕えるリーダーシップと矛盾するからです。階級制度がある組織に戻ってアジア学院で学んだことを実施するのは難しく、卒業生たちは組織を離れざるを得ないこともあります。」

卒業生40番は研修を受けるために注いだ資本に対し周囲から見返りを期待されたことについて説明し、他の人たちから聞いたことをこのように語った。「(投下した資本を取り戻すという)期待はとても高かったです。組織の人たちは、私たちが日本で研修をして何か目に見える成果を持ち帰ってくると考えていました。しかしこれは草の根的な活動についての研修です。組織の人たちからは『わざわざ日本まで行ったのは堆肥のつくりかたを習うためか』と言われる。しかし、私たちが変える必要があったのは、まさにこのような反応なのです。」

人の信念や行動を変えるのは容易ではない。卒業生66番はこのように述べた。「人々は新しい考えを受け入れますが、古い考え方をやめようとは思いません。新しい考えについて理解しても、新しいことをしようとは思いません。」卒業生111番も、人々にとっての利益や有利になることを示す必要があることを強調しながらこのように話した。「人は理解できないことは信じないという問題があります。ですから私たちは、その人々にとって有利になるということを実際に示さなければなりません。また、専門家の中には(有機農業を)全く信用していない人たちもいます。」



自分ではコントロールできない外部的な圧力

帰国した卒業生たちは、さまざまな外部的な圧力に直面した。食料不足、飢餓、災害などが日常的になっている地域出身の卒業生にとっては、農業や遺伝子組み換えの種子を利用するという方法を変えるのは難しいことだった。卒業生62番はこのジレンマについて話してくれた。「私のいる地域はよく自然災害に見舞われるので、さまざまな問題があります。私たちは、こうした災害や食物を必要としている人たちに素早く対応しています。緊急時の不足に間に合わせなければならないので、いつも有機農業などの自分たちの価値観にしたがって活動できるわけではありません。」

地元地域の政情不安、紛争、国境や政治的な変化などは、予期できない方法で卒業生たちに影響を及ぼしている。卒業生103番はこのように話した。「アジア学院での研修のあと、自分がそれまで働いていた場所へ戻ることができませんでした。私がいた地域にはたくさんの自警団があり、1991年には大規模な殺戮行為が起きました。そのために、もう二度とその地域に足を踏み入れることができなかつたのです。私は他の地域に異動させられました。ですから、計画していたことを実行に移せなかつたのです。」

政府の方針や国際NGOの仕事が変革の妨げになる場合もある。卒業生97番は「私たちが新しいことをすると寄付をしてもらえなくなってしまうので、自分たちがしたいことができません」とため息まじりに話した。遺伝子組み換え作物の促進、外来性の種子、農業や化学肥料の使用継続が、組織の変革を困難にしている。卒業生7番はこのように言っていた。「政府は農業や化学肥料に助成金を支給します。だから、その利用を変えようという話をするとき笑われてしまうのです。農業や化学肥料を使うと食物が大きく成長した見ても良くなりますしね。みんなを説得するのに3、4年かかりました。」

農業が土地を耕すアグリカルチャーから産業化してアグリビジネスになり、土壌や食料生産そして労働者たちが多国籍企業のコントロール下になってしまったことで、地域社会が地元の資源を利用できなくなってしまうことも、卒業生たちの仕事を妨げている。こうした社会の変化が日常生活にどのような影響を与えているかは、そこで暮らす地域の人々には見えにくい。卒業生106番はこのように話した。「人々は、農業を使う多国籍大企業に自分たちの人権が侵害されていることに気がついていません。」

こうした困難にもかかわらず、多くの卒業生たちはプログラムの実施についての前向きな経験談や何年もかけて達成した活動、自分たちがコミュニティに良い影響を与えることができたことをどのように感じているかなどについて語ってくれた。アジア学院にとって、卒業生のさまざまな課題を知ることは、学生たちが将来直面する問題により上手に対処できるようになるようにプログラムを改善・強化するよい機会になっている。

卒業生が
地元に戻った
後に直面する
多くの課題は、
過去の紛争に
よって残された
地雷など、
自分で制御でき
ないもの
(カンボジア)

”
卒業生66番
新しいことをしようとは思いません。
古くは新しい考えを受け入れませんが、
新しい考え方をやめようとは思いません。
新しい考えについて理解しても、新しいことをしようとは思いません。
新しいことをしようとは思いません。

卒業生たちの ストーリー

ここからは本評価事業にあたり訪問した、スリランカとフィリピン在住の卒業生の活躍についてとりあげていく。この卒業生たちは農業技術や知識を伝えることで地域社会に変化をもたらしただけでなく、アジア学院の多くの価値を取り入れ地域共同体の開発を導いた。

① スリランカの事例

1997年から2014年までの間にアジア学院を卒業した90人以上のスリランカ人のうち26人が今回の調査に参加した。回答者の仕事は様々で、いろいろな民族団体や宗教団体を含む。ここからは、農業、組織運営の技術や知識の移転のみならず、アジア学院の価値の分かち合いを通じ、地域社会にポジティブな変化をもたらした卒業生たちの多様な方法の一部を紹介していく。

スリランカではアジア学院同窓会 (ARIGA) を通じ、卒業生が強靱なネットワークを築いており、アジア学院への入学志願者の募集や指導者の育成を行っている。



農村部の貧困層への災害救援をするラキ

実例ストーリー① ラキ & ネルム

ラクシユマン・ペレラ (通称・ラキ、77年)
ネルム・ジャヤセカラ (通称・ネルム、77年)
現在は退職している。過去にキャンディ・シティ・ミッショ
ン・キリスト教青年会 (YMCA)、ハビ
タット・フォー・ヒューマニティ・スリランカ、
ケア・インターナショナルに勤める

アジア学院での研修のあと、ラキとネルムはスリランカに戻り、チームでキャンディ・シティ・ミッションの仕事を始めた。その年の後半に二人は結婚することになる。二人は35年間、農村地区の人々に活力を与えることを目的に低収入の家庭などのために尽くし、持続可能な複合農業の実践、健康的なライフスタイル、所得創出の技術、異宗教間の理解を促す取り組み等をしてきた。

ネルムとラキは「自分たちの持つものを分かち合うことで、我々は共に生きていこう」という、一つの目標を掲げ地域社会へ尽くそうと、強い意識を持って働いた。この目標が自分自身を駆り立てる最も重要な原理であったとラキは話した。二人は、個人レベルやそれぞれの地域社会で平和を築くことが国民の未来に不可欠だと信じていた。

ラキは農家に焦点を当て、ネルムは主に女性や家庭を持つ人々を対象にして共に働いた。またあらゆる計画の意思決定の際に、女性の参加があるように働きかけた。もしネルム本人に質問すると、ただラキと一緒に取り組んでいるだけだと控えめに答えるかもしれないが、彼女の役割は非常に重要だった、とラキは話した。彼女は家庭を持つ人々を対象にしたプログラムを用意し、栄養、子供の健康、バランスのとれた食事の必要性、教育の重要性、そして子どもたちを学校に行かせるために家庭で行なうべきサポートについて教えた。また彼女は、家族内や、地域社会で女性ももっと参加し、活躍できる立場をとるよう奨励する上で模範となった。

ラキとネルムはキリスト教徒であったが、ヒンズー教徒、仏教徒やイスラム教徒らが参加しやすくなるようにいつも意識していた。宗教を超えた活動を通して二人は、違いを認め尊敬の念を育てるというアジア学院の価値感を伝えていた。

キャンディ・シティ・ミッションに勤めた後、二人は地域の団体と国際的な団体のプロジェクトを通じて地域社会づくり、教育や草の根のエンパワーメントの促進に取り組む、次のような活動を行なった。

- 家庭菜園向け有機農業技術の指導
- パティック (ろうけつ染め)、大工、食品加工による所得創出活動
- 酪農とヨーグルトやチーズなどの加工品づくり
- バイオガスの生産
- 幼稚園の設立
- マイクロ・ファイナンス・プログラム (小口融資制度)
- 安全な水、下水設備の計画
- 環境保護計画
- 住宅供給計画の向上
- 地域を基盤とした老人向けリハビリテーション

また数年の間ずっと、ラキは人々にアジア学院研修プログラムへの参加を勧め、同窓会創立者のひとりとして、情報交換や相互扶助を奨励した。

実例ストーリー② レヌカ

レヌカはもっとも貧困な立場にいる女性の農家やその家族に焦点を当てた組織「ウェリゲボラ WDF」を設立した。ウェリゲボラは、家庭用の野菜畑を作るために女性向けの有機農業の技術育成を行った。菜園づくりは果物や野菜の日常的な収穫につながり、自分たちの食べる物以外のものを販売し現金を手に入れることができる成果を生んだ。収入の獲得は、子供の教育を支えたり日用品の購入を可能にするなど、人々の生活の質の改善に活用された。またウェリゲボラは村の女性が集まり共同でマイクロ・ファイナンス・プログラム (小規模融資プログラム) が行えるよう手助けをし

レヌカ・バドゥラカナンティ
(通称・レヌカ、04年)
現在の団体…
ウェリゲボラ WDF



地元の地域社会の女性と協力するレヌカ



地元地域の将来のリーダーを育成するために、青少年たちと活動するチャミカ



アジア学院から帰国して以来、和解プログラムに携わってきたマッキーン

た。ローンに加え、貯蓄や将来設計の研修は、より良い生活状況や自信の確立などをもたらした。

調査で訪問した女性のグループでは、6人のうち5人の女性が家族のために飲用水や電気の確保ができる新しい家を建てていた。さらにウェリゲボラの与えた影響には、家族や地域内での女性の地位向上が含まれる。ある家族の夫は当初、男性が女性に多くのことを望んでいなかったがこれが変化しと説明した。少年や男性たちは自分たちの生活に起きた変化を目の当たりにするようになると彼ら自身も変わっていった。後に男性たちは、女性や少女の家庭菜園の仕事を時々手伝うようになった。

レヌカが組織したシードバンク(種子銀行)では、地元の人たちが種を交換し、余った種を組合が配布できるようにした。結果、地域で作付けされる植物が多様になり土地固有の食文化を存続させることができた。また各家族が、種を買う必要性を減らし種子配布制度への依存を軽減した。レヌカが開発したプロジェクトや計画は、すべて地域社会の人々に起因する。家族レベルで目標を定め計画をつくることを勧め、そしてそれが地域のグループに持ち込まれると地域のグループが優先事項と目標を決め、その年のプロジェクトを建てる地域のグループの計画はその後、村全体の計画となった。レヌカの組織は同じ地域の別々のレベルにいる人達を対話させることによって、協力的な地域社会づくりを促進させたのだ。

実例ストーリー③ チャミカ

チャミカ・ジャインシンハー・アーラッチギ
(通称:チャミカ、00年)
現在の団体:ヘルシー・ランカ

アジア学院から帰国後、チャミカは約1000もの小規模な茶畑の農民とともに働いた。そして野菜の種や果物の苗木などを地域社会に配布し、有機農法でそれらを育てる方法を教えた。しかし有機栽培を始めるにあたって、これまで政府の助成金制度で農業が配給されていたため、まずは人々に農業の危険性について理解してもらう必要があった。そして農業により悪化していた状態の土壌をチャミカは牛ふんを使って改良する手助けをした。時間の経過とともに、地域の人々は地元の資源を使うことができるようになり、堆肥や自然農薬の作り方を覚えた。

村で市民社会を築こうとするときチャミカは、組織内の人間関係が平等である人に仕えるリーダーシップを用いることこそが、持続可能な発展に最適だと分かった。彼は自身のリーダーシップの姿勢を変え、よりよいコミュニケーションを通じて対人関係の構築を向上できたと気付いた。彼は、ポジティブとネガティブの両方のフィードバックを推奨し、それらのフィードバックをイベントやプロジェクトに取り入れることで、チームワークも向上すると感じていた。チャミカは意思決定への幅広い地域社会の参加に焦点を当て、女性の参加の大切さを説いていった。

彼の設立した新しい組織「ヘルシー・ランカ」でチャミカは農業や健康的な食事といったことのみならず、薬物乱用やジェンダー規範などといった繊細なテーマについても幅広く取り上げた。彼が焦点を当てたのは「男性のアルコール乱用など、男性が放棄した責任について女性が代わりに責任を持つ必要はない、ということ」を女性に理解してもらう手助けをすることだ」と話した。ヘルシー・ランカはそのような世話の無理強いやアルコールがらみの不品行について女性の理解を深めることが目

的だ。ひどい扱いに耐えていく必要なんて無いのだと気づけば、もっと女性は強くなることができるだろう。チャミカはより大きな全国的な計画を作ることに焦点を当て、新たな五カ年計画の為のプログラムを立ち上げている。助成金ではなく、知識や技術の形で資源を分かち合うという戦略だ。彼は金銭的資源のみの供給では人々の生活は向上しないとわかったのだ。また、薬物、タバコ、アルコールの乱用防止や、子どもの権利、ジェンダーによる差別や環境について村のトレーナーを生み出すような若者のリーダーシッププログラムの開発もしようとしている。こうした若者たちは自分たちの生活する場所で直接、生活の質に影響を与えるようになり、未来の地域のリーダーとなることだろう。

実例ストーリー④ マッキーン

スリランカ北西部出身のイスラム教徒であるマッキーンはアジア学院のプログラムについて、リーダーシップや地域社会参画に対する自身の姿勢を変えてくれたとして、成功であったと話してくれた。アジア学院卒業後、彼は紛争後の和解、女性のリーダーシップ、家族発達プログラムなどの分野で働き、地域社会づくりや各家庭の生活の質の向上に取り組んだ。彼は、自身のリーダーシップの姿勢も変えた。人に指示をするのではなく、権限を地域社会と分かち合い、共に働くようにしたのだ。そうすることでプログラムに対しよりオーナーシップ(自分自身の課題として捉えること)を持つことが推奨されるようになると彼は感じた。

紛争地域の中心といえる場所で働いていたマッキーンは帰国後、紛争調停に力を注ぎたいと考えた。アジア学院で様々な種類の人達とのコミュニケーションや交渉の仕方を学んでいた彼は、和解のためのセンターを組織し、多様な地域社会の人々に理解や人々の間の合意を育てる様々な活動を行った。マッキーンは仏教、ヒンズー教、イスラム教、キリスト教徒を含む国内避難民と地域住民との間で安全に議論できる場所を作る一方で、公的な活動にあまり参加しないイスラム教徒にとりわけ焦点を当てた。農業に従事する人々のために、彼は家庭菜園づくりや、有機物の循環、堆肥化などの有機農業の手法を強調した。しかし彼にとってこれらのプログラムは、相互理解を構築し様々な人々を地域社会に迎え入れるという大きな目標を達成するための方法に過ぎないと話している。マッキーンの組織 WODEPT はリーダーシップの啓発に加え、男性にもっと家族のことに参加してもらい女性にもっと家庭の外のことに参加してもらい男女平等参画を目的としていた。今のところ彼は、女性たちが集まるのを助け、彼女たち自身が地域社会の問題を実際に解決できる自信を持つのに役立っていると感じている。WODEPT のマイクロファイナンス制度は女性向けであり、アジア学院で学んだ参加型のアプローチを活用している。マッキーンの次のステップは、「地域社会政治」。女性や他の人が地域でリーダーシップに従事し、また地域社会の人々が社会問題について理解を深めることで、地域社会でリーダーシップを発揮するのに備え自信を持ってもらいたいと考えている。彼が卒業した 2002 年を振り返ると当時の女性は社会に関わるということに対してあまり積極的ではなかった。2015 年に地域のイスラム女性がアジア学院に参加することが決まり、彼は未来を明るい目で見つめている。

タイユブ・レッキン・モハンマド・マッキーン
(通称:マッキーン、02年)
現在の団体:WODEPT(公正・平和・節制の構築のための女性団体)

フィリピンにおける持続可能な
農業運動の分野で活動しているアリエル

②

フィリピンの事例

アジア学院を卒業した100名以上のフィリピン人のうち、30名が今回の調査に参加した。ほとんどの聞き取り調査は2014年4月に行われた隔年開催の同窓会にて行なった。

フィリピン人卒業生の多くは地域の市民団体が宗教機関で活動している。彼らの活動拠点は、北はルソン島、南はミンダナオ島まで様々であり、教育者、農家、牧師、修道女、地域の活動家として様々な形で人々の生活の向上に貢献している。



実例ストーリー① アリエル

アリエル・デラ・クルース
(通称:アリエル、05年)
有機農家、西ネグロス州

アリエルは西ネグロス州に住む有機農家だ。彼の農場を訪問し聞き取り調査をした際に彼は、天然資源よりビジネスや利益を優先するフィリピン政府の姿勢が、現在の食糧アクセスの状態と密接に関係していることを話してくれた。「フィリピンは熱帯の国なのに、食糧が不足しています。アジア学院で、地域社会とそこに住む人々が生き延びるための方法を身につけました。」自分たちの資源にアクセスすることができれば自活できると学んだアリエルは、地域の自給自足を最優先にし、絶えず若者にこう話したのだという。「自分自身を育成し、自立しなければなりません。」彼は、住民に自身の農場を訪問するよう促し、技術、知識、そして概念を共有した。「知りたければ見に来なさい」と近隣農家に伝え、彼の自給的な農場の様子を見せている。

アリエルは2014年にネグロス島の傑出した小規模有機農家に与えられる「ネグロスの優れた小規模有機農家」の賞を受賞した。また遺伝子組み換え(GMO)に反対する法改正や小規模農家保護のためのアドボカシー(政策提言)活動も行っている。アリエルは自身の農業で積んだ経験を活かし、国際NGOグリーンピースがフィリピンで行ったキャンペーンにおいて、政府やメディアの前でGMOや農業を使う化学農法の影響について証言した。ネグロス島はフィリピンの中で遺伝子組み換えの種子が許可されていない地域の一つだ(2014年時点)。今後の課題についてアリエルはこう話す。「条例や法案を通過させ説明をするのは簡単だけれど、最も重要なのは、人々の目を如何に覚ますことができるかです。農家だけでなく自治体でもGMOの影響について目を覚ましてもらわなければいけません。」

アリエルは、農業と社会正義の課題との関係について広く話した。「一番重要なのはつながりです。農業、社会、人々の理解、経済、環境、教育といった色々なものがつながっています。たくさんの人々が有機農業をするよと言ってもらうには利益だけの話ではありません。人々がどう感じるか、どう理解するかということが大事なのです。何千万、何億と儲かることよりも、なぜやるかという動機が肝心です。理解しなければ、以前のような持続可能ではない方法に戻ってしまいます。」

アリエルは研修センターをつくり、実践による学びや共に生きることで分かち合うといったアジア学院に似た手法のプログラムを導入することを計画している。彼はこのセンターを通じて協働での学びあいの中で、有機農業の技術や知識だけでなく、自給自足や持続可能性といった価値についても伝承していきたいと望んでいる。

実例ストーリー② ホザナ

ホザナは、ミンダナオ島ダバオ市、市役所農業課の外部研修としてアジア学院に来た。行政からの学生は少なかったが、彼女は他の卒業生と同様に、有機農業やリーダーシップ、地域社会づくりや価値観など、技術や知識に基づいて学んだ経験について感想を述べた。

アジア学院に来る前、ホザナは化学農法を実践していたが、農業や化学肥料といった化学物質が与えるマイナスの影響について知り、有機農業の利点を学んだ後、有機農業の手法や利点を促進する目的をもって帰国した。

地域社会の人々と直接働くことの利点を学んでからというもの、ホザナはマネジメントとリーダーシップの方式を変更した。かつて会議や訓練を行う際は、彼女は彼女自身であった。当時はそれがリーダーの役割だと思っていたからであるが、アジア学院を修了した後、参加型の、皆の同意に基づいた手法を取り入れるようになった。誰もが学びの過程に直接参加できる機会を持つようになるためだ。彼女の担当する市の研修は、有機農業について話す講座から地域社会の人々の積極的な参加へと発展し、直接的に様々な技術や手法を実際に示すようになった。

ホザナは、実際のニーズや状況を見出すためには、多様な地域社会の人々の参加が必要だと気づいた。そこで、農家や農業の協会だけでなく女性団体や農家の婦人、子供が関わる、より包括的なアプローチに変えていった。彼女自身が地域社会へ溶け込むにつれ、現場の要望やニーズを理解できるようになった。また他の人々との協働が進むほど、その人たちのニーズに応えることができるようになった。

地域社会の人々とのより良い関係構築に加え、持続可能な習慣、健康的な食べ物の入手が可能になると、地域社会の情勢に直接参画するようになり共同体意識が生まれた。これまで以上に多くのことを成し遂げるようになった女性たちを見てホザナは驚いた。女性たちは仲買人を避け、市場で直接自分たちがつくった作物を販売し、自分たちの生活を自分たち自身でコントロールするようになったのだ。また地域社会の女性たちは、自然の法則にしたがった自身の生産品の良さについて消費者を教育できるようになった。

ホザナ・グズマン
(通称:ホザナ、94年)
現在の団体:ダバオ市
農業者事務局

実例ストーリー③ ルイス

農業学校で収穫量を増やすためとして推奨されていた化学肥料や農薬を使用していたルイスは、アジア学院に参加した後、有機農業だけを推進するようになった。有機農業を実践することは健康的な食物、人々、環境のための献身であると考えた。他の農家に有機農業への切り替えを説得するうえで様々な困難があったものの、最適な農法としての有機農業に継続して取り組んだ。

現在、彼は農場の外で持続可能な農業と生活を目的とした研修プログラムの開発に取り組んでいる。フィリピンが自然災害の多い国であることを踏まえ、ルイスは災害リスク軽減や気候変動問題への対応も行っている。農家や地域社会の人々がこうした環境の問題と自分の仕事との関係性を理解し、未来を見据えた計画をすることが必要だからだ。

ルイスはアジア学院のリーダーシップ研修を基盤に、自身の研修プログラムをより参加型で包括的な手法になるよう改変した。アジア学院に入る以前の彼は、「どんなプロジェクトやプログラムについても自分ひとりが決め、単独で意思決定をしていたけれど、今は、地域社会の人たちと必ず相談します」と話している。今では、直面する課題や様々な対処法について共に議論し、様々な見解のフィードバックを得た後、それらを一つに統合した解決法を共に作りあげようになったのだ。

ルイスは地方自治体の意思決定や組織の参加率を上げるためにどんな努力をしているか説明してくれた。彼は、とりわけ農業団体への加入が少ない女性の参加の向上を試みているという。意思決定は何を計画するかとかどの種類の種を蒔くかといったところから始まるものかもしれないが、大きな変化を生むためには男女両方の参加が大事だとして次のように話した。「普段、男性がトップに立つことが多いため、男性も関与する必要があります。女性の参加に抵抗を感じる人がいる地域もあります。だが変化を起こすためには、時間と皆の参加が必要です。」ルイスは続けて、男女ともに地域社会において自治体への参加や地域の開発協議会への参加が増加し、変化が目に見えるようになったと話した。

アジア学院の研修が地域社会での変革を促しているか、と尋ねたところルイスは、社会・政治的变化が地域で起こったのを目にしたとして次のように話した。「私は組織と共に活動し、組織は非常に多くの地域社会や人々と活動しています。私が組織で学んだことは、地域社会に共有します。すると時には社会的、政治的な変化が見えてくるようになります。」

ルイス・アルエザ
(通称：ルイス、85年)
現在の団体：サンバ
社会行動センター



自然農法 持続可能な環境 社会正義の促進
のために30年以上活動しているルイス



カラガ市民銀行とフレンド財団にいる女性の卒業生たちはアジア学院で学んだことを多く取り入れている

事例ストーリー④

卒業生のチームと一緒に活動している

ミンダナオ島のサンフランシスコにある二つの関連団体で働く4人の卒業生は、地域社会を基盤としたマイクロファイナンスと呼ばれる小口融資サービスや知識や技術育成の研修を通じて、農村の人々の生活を向上することに力を注いでいる。二つの組織は、地域の農家や零細企業を営む人々、漁師たちに役立つことに取り組んでいる。

職員の話によると、1977年卒業のカルメリタは人に仕えるリーダーシップを取り入れ、組織全員の参加に重点を置き、意思決定に誰もが関与するようにしている。カラガ市民銀行の職員たちは、参加型の手法を取り入れ、組織の職員が考える地域社会のニーズではなく、地域社会の人々のニーズをより理解しているほか、地域社会の要望やニーズを査定し、プログラムの内容がそれらに合うようにしている。

カラガ市民銀行に勤める2004卒業のアルマは、研修に問題解決手法をどう取り入れているか説明してくれた。研修では参加者が廃棄物の処理などの地域社会の問題の見直しを行うことを必須としており、その解決策を作り上げていく。研修の後、参加者の計画は地域の支持を得ることを目的に該当の村に導入される。これまでに導入された事例は、植林、排水路の建設、地域環境の清掃、自家菜園の造設などがあげられる。これらの改善により個人や家族レベルのみならず、地域社会が良くなる影響が見られた。アルマによると「その後の調査の際、地域社会が変わったと言ってくれる人がいます。」と話しており、何人かの参加者からは生活の状況を変えることができたとして「研修参加によってエンパワーメントになったと感じたと言ってくれた。」

2006年、2008年にそれぞれアジア学院を卒業しフレンド財団に勤めるタタとジェンは、アジア学院での学びをもとに研修プログラムの開発を行なうことができた。聞き取り調査でジェンは、複合型有機農業を広めるためのモデル・ファームを紹介してくれた。また技術開発や栄養、環境教育に焦点をあてたその他のプログラムについても紹介した。

タタの説明によると、収入を生み出すための研修における焦点は女性であり、その理由として女性が雇用機会に恵まれず技術を手にしていないことが多いからだと話している。研修では参加者の関心、ニーズ、利用可能な資源に基づいて学ぶ技術が選ばれる。そして過去の参加者が、大変わかりやすく実践的に行われる研修であると感想を述べたことをタタは教えてくれた。タタは自分自身やジェンにとってアジア学院の研修が個人的な成長をサポートしてくれたように、ここでの研修に参加する女性たちは収入を生み出すだけでなく、自身の力について自覚するようになり自信を持つようになると話した。

現在の団体：フレンド財団
アナリン・ロサバン・ゴンザレス
(通称：タタ、06年)
ジェナリン・オリベロス・ヘジーナ
(通称：ジェン、08年)

現在の団体：カラガ市民銀行
カルメリタ・ピラオエン
(通称：リタ、77年)
アルマ・レイソン・カステイロ
(通称：アルマ、04年)

卒業生の ストーリーから

これまで紹介してきた事例のように、卒業生は人に仕えるリーダーシップの手法に強い影響を受けており、卒業後の活動では農業技術や専門的な知識を生かしている。そして社会正義の価値観を目標とし、虐げられた人々と共に働くという卒業生たちの献身が、長期的により深い影響をもたらしている。また、アジア学院での学びが、ひとたび組織や地域社会に伝達されると、人々はライフスタイルや環境の持続可能性を考えて包括的な参加型の地域社会づくりに焦点を定めるようになる。それがより多くの機会や生活の質の向上をもたらしており、地域レベルで生まれる変化は、本研修プログラムが価値観の変革を促進していることを示している。

募集および 選考方法

本評価事業において、卒業生たちには、アジア学院の応募者としてふさわしい人物像、募集および選考方法、研修後のコミュニケーションの状況などについても尋ねた。それによって、アジア学院の研修プログラム、選考制度、卒業生たちのネットワークなどを改善するための数多くの提案を得ることができた。



一つ一つの応募書類に真剣に目を通し、検討するアジア学院の職員

募集および選考方法の概要

1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
送り出し団体の募集へ向けた働きかけ				送り出し団体を通じた個人に応募書類の提出				応募者の予備選抜							
送り出し団体となる可能性のある組織の検討と決定												入学予定者の決定			
												入学予定者の到着に向けたアジア学院側の準備			
												到着			

応募者の採用と選考方法

送り出し団体となる組織の役割

聞き取り調査によると、ほとんどの卒業生は、送り出し団体組織は必要不可欠だと話していた。しかしその一方で、限られた社会的基盤しか持たない人でも個人として応募できるようにするべきだと感じた卒業生もいた。応募者の仕事、業績、リーダーシップ力、地域社会での活動などを査定するときに、送り出し団体があることは予備選抜を行なうひとつの基準として役に立つだろう。しかし、送り出し団体に戻った卒業生が自分の学びをそこで実践することをアジア学院が期待しているなら、アジア学院の価値観や卒業生に期待されていること、そして送り出した人が確実に理解できるようにするために、送り出し団体はより積極的に研修の内容について理解していなければならない。また、送り出し団体の大切さを感じていた人たちは、アジア学院は送り出し団体ともっと頻繁に連絡を取るべきだと思うことが多かったようだ。送り出し団体とのこうしたコミュニケーションは参加者の募集や研修後の実践の進捗状況を知るのに必要なだけでなく、草の根レベルでのニーズや現状についての実体を伴った新しい知識を得ることもできる。そしてこうしたものは、アジア学院の知識的な基盤を強化したり研修プログラムの方向性を決めるのに役立つ。

送り出し団体となる組織の募集

これまでアジア学院では、宗教的あるいは超宗派的な組織や過去の送り出し団体とのネットワークに基づいて募集を行ってきた。そして現在アジア学院は、アウトリーチを拡大するために、プログラムの情報を共有してくれるより多くの組織を見つけることを検討し始めている。

送り出し団体の募集のためにアジア学院が利用、拡大し、ネットワークを強化した方が良く卒業生たちが提案しているのは以下のようなものである。

- ・ キリスト教の教会や関連団体
- ・ 超宗派的な組織やネットワーク
- ・ 過去の送り出し団体
- ・ 卒業生や卒業生たちの組織
- ・ 宗教的な多様性をより促進するために、特に非キリスト教徒の卒業生に注目する
- ・ 国の登録 NGO 団体やネットワーク組織

アジア学院の応募者としてふさわしい人物像

職員や卒業生たちは、アジア学院がプログラムの参加者として対象にすべき人物像についての見解を語った。農村や農業コミュニティの指導者たちを中心に参加してもらいべきだと答えた人もいたが、なかには草の根的な活動をしている他の指導者たちも対象にすべきだと言う意見があった。その理由は、そうした人たちも研修プログラムで得た技術、知識や価値観を利用できるからだ。

応募者にふさわしいとして、重複した回答が見られたのは、以下のよう人物像だった。

- 1) 直接的に地域社会に関与している人
- 2) 地域社会のニーズを理解している人
- 3) 地域社会を基盤とした変化をもたらすことができる人
- 4) 帰国後に、自分の経験や役割に基づいて、人に仕えるリーダーシップを実践できる人

その他にも、広い心をもつ人、熱心に仕事をする人、柔軟な人などの性質があげられた。

大半の卒業生が話していたわけではないが、アジア学院のアウトリーチや募集には以下のようなものを取り入れるべきだと感じている人もいた。

- ・ より宗教的な多様性を確保するために、異なる宗教的な背景を持つ人をこれまで以上に募集する。
- ・ (キリスト教の)聖職者や牧師ではない一般信徒の数を増加させる。
- ・ 地方政府の職員—この研修を利用できるほど十分に自立している人たちがいる国では、農業改良普及員に注目する。
- ・ NGO 職員—草の根の活動をしている団体やコミュニティで働いている職員を参加させる。

参加者の予備選抜と選考

アジア学院の職員たちは、何週間もかけて応募者たちの書類を慎重に吟味する。また、予備選抜をより包括的に行なうために、応募者について卒業生や地元組織のリーダーから意見を聞くようにしている。卒業生の何人かは、Skype や Viber (パイパー) などのインターネット通話サービスを利用すれば、1対1の聞き取り調査をたくさん行なうことができるようになると提案してくれた。応募者のもとを訪れて直接聞き取り調査を行なうという提案もあったが、財政的な問題でそれは不可能だろうということは、ほぼ全員が理解してくれていた。

多くの人たちは、募集や選考過程に卒業生がより積極的な役割を果たすことができると考えていた。卒業生たちは、地元の状況と研修プログラムの両方を知っている。このことは各地方を旅して回る時間や元手が限られているアジア学院の職員にとっての助けにもなる。移手段、経済的そして言葉などの障壁があり、できることには限界があるが、応募者の予備選抜や審査における卒業生の役割はとても重要であると多くの人たちが感じていた。

参加者の予備選抜とともに送り出し団体の募集において卒業生がもっと積極的に活動すべきだということは皆が認めている。しかし、その中で卒業生がどのような役割をするかについてはさまざまな考えがある。もっと強い決定権を持つべきだとする人もいれば、アド

バイスを与えてくれる存在になることを好む人もいる。また、あまりに卒業生が大きく関与すると将来的に研修を受けるにふさわしい応募者たちが排除される可能性があると考える人もいる。そして選考過程では、予備選抜が行われ何人かが合格し何人かが不合格になる。したがって、卒業生が推薦した候補者が合格しない場合にその卒業生は所属組織や地域社会で面目を失うことがあるということも、アジア学院はきちんと理解していなければならない。

卒業生たちは自分の見解を話す際に、年での多様性の大切さを強調していた。多くの人が、研修を成功させるには、ジェンダー、人種、民族、出身地域、国、所属組織の種類そして宗教のバランスをとることが大事だという考えを持っていた。言語能力や自身の地域社会や組織に貢献する責任も、共通のテーマとしてあげられていた。

卒業生の中には、アジア学院の募集対象国を増やすことが大切だと感じた人もいた。一方では、対象地域を拡大する前にひとつの国において影響力を持つのに十分な人数の卒業生を輩出することを優先すべきだと感じた人たちもいた。確かに、募集する国を多くすればアジア学院の到達度は上がるだろう。しかし、ある国出身の卒業生が必要な一定数に達するまで増やすことも大切であり、このことは学びの実用化を促す協力的な環境をつくるのにつながる。

卒業生や送り出し団体との連絡の維持

卒業生や職員たちは、資源は限られていてもアジア学院は卒業生の帰国後は今よりも定期的に連絡を取ることを優先すべきだと考えていた。しかしながら、技術のより効果的な使い方という事項を除いて卒業生たちと連絡を取り続ける方法についての具体的な提案は見られなかった。

多くの卒業生は、アジア学院の定期刊行物「ネットワーク」を高く評価していた。これは、通常年に2回発行される卒業生向けのニュースレターで、紙の印刷物や電子メールの形で卒業生の手元に届けられる。しかし、最新の内容や、環境、農業技術、自分たちが直面している開発の課題などに焦点を当てたテーマの記事を読みたいと思っている人も多かった。

アジア学院が最近の卒業生をどのように支援できるか、またどうすれば参加者たちに帰

国後のためのより良い準備をさせることができるのかについては、さまざまな意見が交わされていた。その中には、送り出し団体とより頻繁にコミュニケーションをとるために、卒業生に帰国から半年が経過した時点で進捗状況を報告することを要求したり、学生に自分の学びを基に農家の人や職員や若者たちなどに対する研修プログラムを作成させるというものがあった。また、アジア学院に在籍中に1年間の具体的な行動計画を立てることを提案してくれた人もいた。それは、参加者たちが実践と自分たちがこれから直

面するかもしれない課題の両方に備える役に立つ。卒業生たちの正式な組織やネットワークがない国では、卒業生たちが帰国後にそうした団体をつくるのを、アジア学院が積極的に手助けすることができる。それには、同じ国出身の他の卒業生を紹介する、メーリングリストの作成法やデータベースの管理法そして簡単なニュースレターの発行方法などの技術を共有するなどが必要となる。参加者あるいは職員が既に持っている技術や知識を利用して、これらのことは可能になっていくだろう。

卒業生や卒業生の所属組織の役割

アジア学院の卒業生が帰国後に果たすことができる役割についての意見。

現在進行形

アウトリーチ、ネットワークの強化

- ・送り出し団体の募集
- ・応募者の予備選抜
- ・参加者に対する研修参加前のオリエンテーション

アジア学院へ専任の常勤職員として参加

- ・研修カリキュラムの更新一定定期的な評価を基に行なう
- ・卒業生への経過観察のための連絡
- ・研修への関与(現在2人)
- ・常勤としてのアジア学院の運営への関与(現在は人)

組織的な強化

- ・帰国した新しい卒業生への経過観察のための連絡
- ・他の卒業生の業績の報告
- ・研修の実用性の評価

今後拡大または発展

卒業生による諮問委員会

- ・日本で入手できない情報諮問
- ・アジア学院役員で決定され、あるいは必要とされた特定の目的に関して、オンライン上で一年に2から3回集まることが可能
- ・どここの地域の人を、何人、どのような基準で、どう選ぶかを、アジア学院が真に必要としていることや、卒業生が直面している能力や状況に基づいて決めるべきである。

筆者あとがき

1 冊には収めきれない話が沢山ありました。しかしなるべく本質を捉えるようにしてまとめました。この冊子では、インタビューし、訪ねた多くの人々からの本質的なメッセージを理解しようと努めました。

様々な体験談から明らかになったことは、人に仕える指導の手法、食と命との繋がり、コミュニティづくりの方法のいずれにも現代的な意味があるということです。世界がますます分裂している今日において、人々が集い多様性の中に強さを見出すことができることを示したこの研修プログラムは希望のかがり火と言えるでしょう。

本評価はアジア学院ではこれまでになかった学生、卒業生、職員の話や意見を集める特別な機会となりました。アジア学院の目標や影響、未来について話し合い、振り返ることができました。学生募集や選考の方法、カリキュラム内容、学びとその利用法、日常的な諸問題等に関して今回得られた意見は、アジア学院の今後の組織発展及び研修プログラムの開発に大いに貢献できると思います。

どれほど多くの卒業生が各々のコミュニティを改善しているかを見て頂ければ、今後の戦略的計画を立てる際に職員の方々は励まされることでしょう。また、アジア学院が技術習得だけでなく、社会正義的価値観に影響を及ぼしていることの重要性が示されることで、他の研修プログラムの模範ともなり得ると思います。

より公正な世界を構築するためには、地域レベルで働く際に以前にも増してグローバルな視点を取り入れ、国境を超えた理解と思いやりを育む必要があります。多くの調査協力者が語ったように、世界の変化と共に、アジア学院でも、草の根指導者が21世紀のニーズや状況や課題に直接的に対処して地域の問題に対して持続可能な解決策を講じる力をつけられるように変わっていかなくてはなりません。創立から40年が経ち、世界の飢えと貧しさの問題は相変わらず深刻ですが、グローバリゼーションによって「途上国」と「先進国」の境は明確ではなくなり、テクノロジーの発達により世界は繋がってきています。研修において、地域コミュニティがいかにグローバルな意志決定者の行動の影響を受け、地域の状況がいかに土地管理、資源不均衡、多国籍企業支配、災害、政情不安などの問題と関連しているのかが指摘されれば、アジア学院の影響と卒業生が地域にもたらすインパクトも増すでしょう。



セラジーンと卒業生スプラマニウム・シヴァパッキヤム（2003年）とセワランカの職員。スリランカにて撮影

また、アジア学院が草の根指導者同士の橋渡しをしていくためには、往々にして不足しがちな人材、技術、資金、時間の投資が必要です。アジア学院の職員の方々の献身的で熱心な働きによって得られるものがいかに大きく、徐々に下からボトムアップでもたらされる社会変化に焦点を合わせたプログラムに大いなる可能性があることは、卒業生の話が証明しています。

このプロジェクトを支援して下さった皆様と、特に大小様々なアドバイスをくださった荒川朋子新校長に大変感謝いたします。

最後にこの2年間で多くの人々に深く感銘を受けてきました。調査に参加して下さった全ての卒業生と学生の皆様に感謝いたします。皆様が無言で努力し続けていることはこの研修プログラムの成功を意味します。資材を提供したのはアジア学院でも、実際に橋を造ったのは他ならぬ皆様なのです。

セラジーン・ロシート
2015年4月東京にて

セラジーン・ロシート
NPO（非営利団体）とNGO（非政府組織）コンサルタント
セラジーンについて<https://sarajeannr.wordpress.com/jp/>

アジア学院研修プログラムの調査担当者
アジア学院について<http://www.ari-edu.org>

謝意

この評価プロジェクトはアジア学院(栃木県)とフェッツァー研究所(アメリカ合衆国ミシガン州カラマズー市)の共同プロジェクトとして実施された。

本評価は評価コーディネーターであるセラジーン・ロシートによって行われたが、それと同時に多くの方々の協力をいただいた。その中でも特に、以下の方々の功績に感謝したい。

アジア学院事務局長、副校長(～2014年) 校長(2015年～) 荒川朋子(監修)

上智大学大学院生 リセット・ロプレス、ジョン・リクテン(調査助手)

上智大学教授・デヴィッド・スレイター准教授、リチャード・ガードナー教授(顧問)

アジア学院職員(助言的なサポート)

フェッツァー研究所、プログラムオフィサー、李曉安 博士(忠告や助言的なサポート)

2013年の学生、卒業生、アジア学院職員らの積極的な協力のおかげで、この研究を行なうことができた。

草の根の 架け橋

文：

表紙裏面：李曉安、荒川朋子、大津健一

英語原文：セラジーン・ロシート

英語編集、校正：ステファニー・ジェイン、セラジーン・ロシート

日本語翻訳：藤野悠子、田中恵子、玉川千絵子

日本語編集：田中恵子、玉川千絵子

日本語編集、校正：荒川朋子、大柳由紀子、佐原市郎、セラジーン・ロシート

デザイン、レイアウト、グラフィック：藤嶋トーマス 逸生

写真：

ご挨拶 李曉安、セラジーン・ロシート / p 12、13、14、16、18、22、23、25 アジア学院卒業生 / p 2、15、24、25、28 セラジーン・ロシート / p 15、17、18、19 スティーブン・カッティング / p 20 © Andri Tambunan / Greenpeace and Derek Reinhardt / Clean Water around the World / その他の写真は全てアジア学院の撮影による

印刷：株式会社 新晃社

2015年5月11日

© 2015 by Asian Rural Institute. 学校法人アジア学院

発行：学校法人 アジア学院 農村指導者養成専門学校

〒329-2703 栃木県那須塩原市槻沢 442-1

www.fetzer.org

www.ari-edu.org

草の根の 架け橋

農村リーダーにおける アジア学院の研修効果に関する調査

アジア学院は、40年以上にわたり、計57か国出身の1,200名以上の草の根的活動をしている指導者を迎え、栃木県那須塩原市にて農村指導者研修プログラムを実施してきた。

参加者は9か月間で、
人に仕えるリーダーシップ
持続可能な農業
地域社会づくり

に関する技術や技術を学ぶ。この研修プログラムには、教会、孤児院、草の根活動的NGO団体、コミュニティ組織、教育機関等に所属する地域の指導者達が参加している。

参加者は人に仕えるリーダーシップ、有機農業、地域社会づくりに関する技術や技術を学ぶ。さらに、アジア学院では、世界にはさまざまな考え方、信仰そして問題解決の方法があり、グローバルな課題と地域のローカルな現実とは密接に関わっているという理解が促されるようなコミュニティ環境づくりが意図されている。

研修の全体的な目標は、それぞれの参加者がアジア学院のモットーである「共に生きるために」の真意を発見することにある。参加者がこのモットーに裏打ちされる精神を出身国へ持ち帰り、地域の人々や自然環境との関係において、互いをより尊敬・尊重し、理解し合える可能性が高まるようにするのが、この農村指導者研修の最終的な目標である

